

ISSN 2434-0049

2017

国際協働学習 iEARN レポート

Interactive Collaborative Learning with the World

International Education and Resource Network Report



写真 iEARN 2017 モロッコ国際会議 全体会の様子



特定非営利活動法人グローバルプロジェクト推進機構

(通称) JEARN <http://www.jearn.jp/japan>

国際協働学習iEARNレポート（2017） 目次

番	題名	所属	報告代表氏名	頁
1	ANNE FRANK Meet & Learn ～アンネのパネル展開催7年目を迎えて～	iEARN & JEARN	高木 洋子	1
2	GOMI on Earth ～iEARN forum Collaborative Learning環境作り～	iEARN & JEARN	高木 洋子	3
3	Hiroshima for Peace	iEARN & JEARN	高木 洋子	5
4	防災世界子ども会議 NDYS 2017-2018 ～気候変動と私たちの住む町の「防災・減災・復興」～	防災世界子ども 会議実行委員会	納谷 淑恵	9
5	第2回 世界大正琴交流大会‘琴オリンピック2018イン新潟	アイアーン大正 琴プロジェクト	廣田 元子	11
6	“Girl Rising Project”の実践 ～高3年生選択授業・「年生選択授業・「国際理解」～	啓明学園中校 高 等	関根 真理	13
7	My Name プロジェクト ～iEARN “My Name Around the World”を「深い学び」に繋げる試み～	横須賀学院小学 校	阿部 志乃	15
8	青少年ペンフレンドクラブ（PFC） ～海外文通の取組～	日本郵便株式会 社本社 切手・葉書室	青少年ペンフ レンドクラブ	17
9	大学を拠点とした Holiday Card Exchange プロジェクトの実践	実践女子大学 短期大学部	栗田 智子	19
10	Tokyo youth project Origami プロジェクトを通じた台湾との交流 ～大学と小学校放課後クラブとの連携～	実践女子大学 短期大学部	栗田 智子	23
11	アイアーンプロジェクトを使った短大英語授業	実践女子大学 短期大学部	栗田 智子	25
12	アイアーン沖尚の15年間 ～部活動によるiEARN活動～	アイアーン沖尚	上野 浩司	27
13	台湾、日南國中との交流と生徒の変容 ～台湾国際教育国際会議～	アイアーン沖尚	上野 浩司	29
14	台湾における英語教育の現状とiEARN Japanの課題	JEARN	福井 良子	32
15	台湾とのテディベアプロジェクト ～「相手意識」と「自文化理解」～	金沢市立 大野町小学校	角納 裕信	34
16	2ヶ国語で Teddy Bear Project ～オリンピック・パラリンピック教育の一環として～	東洋学園大学	滝沢麻由美	36

17	Kanazawa Youth Project Teddy bear Project ～テディベアでつながるモロッコの高校生と日本の大学生～	金沢星稜大学	高尾 好	38
18	Kansai Youth Project Folk and Culture Project 活動報告 ～第1回 Folk and Culture Project 神戸市立小部中学校での活動を中心に～	Kansai youth	田中 彩奈	40
19	日本・韓国・台湾における英語教育制度と実態の比較 ～日本の英語教育政策の誤謬に関連して～	白梅学園大学	奈良 勝行	42
20	iEARNモロッコ国際会議報告	金沢星稜大学	清水 和久	44
21	初海外モロッコで見る世界の一端	石川県立 金沢泉丘高校	清水 拓人	49

<http://www.jean.jp/japan/iearn-report/index.html>

ISSN 2434-0049

1. ANNE FRANK Meet & Learn

～アンネのパネル展開催 7 年目を迎えて～

高木 洋子 (iEARN & JEARN)

“じゃあまたね。アンネ・フランクより” 1944 年 8 月 1 日の日記「キティ」にそう記したアンネは、再びこの日記帳を手にする事なく、アウシュビッツ=ビルケナウからベルゲン・ベルゼン強制収容所へ送られ、翌年 1945 年 3 月姉マルゴの死の数日後に亡くなった。15 才であった。

1 はじめに

2009 年にオランダの ANNE FRANK House から、34 枚のアンネの生涯を物語る大型写真パネルが委託され、以後上智大学を皮切りに日本各地で逐次そのパネル展が開催され、その数 96 回に及ぶ。JEARN がパネル展の開催を主導することになったのは 2011 年春以降のことであるが、この 7 年間の全国各地でのパネル展開催は、82 回を数える。因みに 2017 年度は、一月開催 87 回目柳川市立柳南中学校から始まり、12 月 96 回目佐賀市立開成小学校まで、日本各地 10 カ所で開催された。

本事業は、ウェブ管理更新の浅川和也をはじめ、赤松敦子、村崎佳子、上野浩司、杉本範雄、高木洋子により運営されている。

2 目的と方法

2-1 目的

まず、このパネル展を通して日本の多くの子ども・生徒・学生・大人がアンネに出会う場を提供し、彼らがこれらのパネルから、アンネの短い生涯を辿り、更に「アンネの日記」から発信される彼女のメッセージを受け止め、その意思を次世代につなぐことにある。

2-2 方法

対象：日本各地の小・中・高等学校・大学・地域の図書館・記念館・歴史館など

申込方法

次のアンネフランク「カレンダー」を開く：
<https://gcpej.jimdo.com/link/annefrank/calendar/>

開催予定記入が無いことを確認し、オンラインで申込み。

パネル移動

前開催地・次期開催地は、本事務局とともに、移動に関する打合せをする。

パネル移動に関するコスト

各開催地は、次期開催地までの運送費を原則負担する。

報告

終了後は、パネルを使った授業報告や入場者数などの一般報告、参加者の感想やメッセージ、会場の数枚の写真を提出する。これらは ANNE FRANK Web サイトに公開される。

その他

展示に併せて、ミュージカル「ANNE FRANK」DVD もオンラインで購入することができる。更に ANNE FRANK House から寄贈を受けたアンネの大型写真集「ものがたりのあるミュージアム」を送料着払いで希望者へプレゼントする。開催地は勿論、学校図書館・地域図書館にも置いていただきたい。

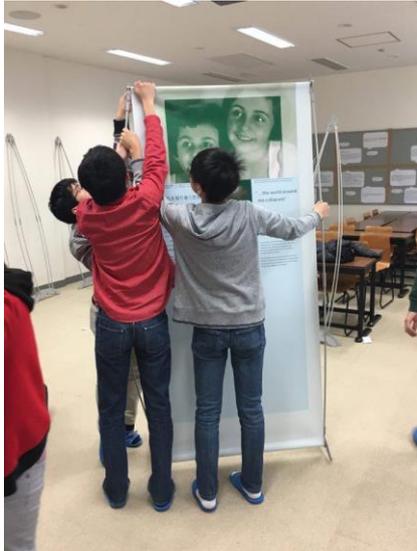
連絡先事務局

当パネル展担当高木宛に連絡をください：
yoko@jearn.jp

3 活動内容

東大寺学園中・高等学校





エリザベト音楽大学



淡路夢舞台



佐賀市立開成小学校



柳南中学校



4 成果と課題

- 第 87 回 1 月 柳川市立柳南中学校
- 第 88 回 3 月 東大寺学園中・高等学校
- 第 89 回 5 月 中央区高井戸中学校
- 第 90 回 5 月 実践女子大学
- 第 91 回 6 月 淡路夢舞台
- 第 92 回 7 月 鹿児島情報高等学校
- 第 93 回 9 月 磐城緑蔭中・高等学校
- 第 94 回 10 月 東海学園大学
- 第 95 回 12 月 広島エリザベト音楽大学
- 第 96 回 12 月 佐賀市立開成小学校

念願であったパネル開催地とアムステルダムの ANNE FRANK House とのビデオ会議が第 93 回磐城緑蔭中・高等学校で実現した。このようなセッションを継続して企画したい。また来年度のパネル展 100 回記念をどう企画するかが課題である。

2. GOMI on EARTH

～iEARN forum Collaborative Learning 環境作り～

高木 洋子 (iEARN & JEARN)

このプロジェクトは、GOMI が辿る長い旅の学習である。GOMI という日本語が iEARN の世界に徐々に広がりつつあるが、その道程はまだ遠い。

1 はじめに

GOMI on EARTH プロジェクトが 2016 年 9 月に iEARN プロジェクトの一環として発足以来、早くも一年半が経過した。

昨 2017 年度は、Pakistan, Egypt, United States, Uganda, India, Taiwan, Japan, Qatar, Kenya, Argentina などの国々から新たに参加校が加わり膨大な生徒たちの研究発表がある一方で、iEARN の特性である Collaborative, Interactive Learning with the World の視点から見ると、特にフォーラムに於ける協働学習環境作りを考える時期に来ていると思われる。

2 目的と方法

2-1 目的

人間が際限なく捨てる GOMI。地球が GOMI の山、GOMI の海になる前に、特に発展途上国における GOMI 教育が重要である。本プロジェクトは、このプロジェクトを通して生徒から家庭へ、家庭から地域へと GOMI 文化が浸透し、身の回りの GOMI から、GOMI Mountains、海底のマイクロプラスチック、海洋の GOMI ベルトなどへ意識を高め、GOMI 問題の解決策を探ることにある。

2-2 方法

主として iEARN “GOMI on EARTH” Forum : <https://iearn.org/cc/space-2/group-478> を使うが、今後は Video Conference で参加教師間や生徒間の学習交流を積極的に進め、Forum へ反映されるようにする。プロジェクトは Teachers Guide を使い、PART I～PART III へと進める。

PART I では、生徒が身の回りの GOMI が最

後の住処 (空・海・陸) へ辿り着くまでの長い旅を追う GOMI Detective として調査・報告をする。

PART II は、資料サイトに載せているビデオや写真をはじめ、生徒たちが積極的に手に入れる情報から世界の GOMI の現実を知る。

PART III は、現実を知った生徒たちが、GOMI を減らすにはどうあるべきか、また何をなすべきか、GOMI 問題を解決する独自の方法や習慣を提供・実践する GOMI Activists となり、その活動を映像・ポスター・詩や物語などで共有する。

3 活動内容

海外の参加校による多くの発表が目立つ。

PART I

<https://forums.iearn.org/iearn-projects-space/categories/GOMI-Part-1---GOMI-Detectives>

- * Kathy (US) Ecology students & LHS Earth Team all UP
- * Zunaira (Pakistan) 22students UP
- * Katherine (US) GOMI Posters
- * Laura (US) 2 screen captures with comments
- * Yunchai (Taiwan) 9 files
- * Chasity (US) 6 classes 143 students all UP
- * Norio (Japan) 16 students UP
- * Michael (Kenya) just started

PART II

<https://forums.iearn.org/iearn-projects-space/categories/GOMI-Part-II---World-GOMI-Reality>

- * Laura (US) “Trash Talk”
- * Salwa (Egypt) Sea Shepherd Marine Debris

* Laura (US) 17 Students all comments UP
PAERTIII

<https://forums.iearn.org/iearn-projects-space/categories/GOMI-Part-III----GOMI-Activists>

*Katherine(US) “GOMI Contest” in the class

*Laura(US) Posters & comments

*Yunchai(Taiwan) Digital posters on GOMI



Many students & teachers post good comments on this digital posters.

*Liao (Taiwan) World Ocean Day in Taiwan



*Sallyann(AU), Upul(Sri Lanka), Jamie(San Diego) talked about Plastic Bag Free.

*GOMI on EARTH ワークショップ at iEARN Conference in Morocco.

Project facilitators:

Lakshmi (India) YOKO Kathy(US)



4 成果と課題

このプロジェクトは、生徒たちが GOMI に目を留め、GOMI を使って SDG s、特に Healthy Earth に関心を高める導入プロジェクト・使えるプロジェクトとして、iEARN の皆さんには評価されつつある。インドからは教育の機会がなかった極貧民層の子どもたちに生活と教育の場を作るプロジェクトを通じて、この GOMI on EARTH を使った基本的な生活習慣作りをすると報告があった。

問題は、PART I~PART III への学習意欲を高める Interactive Collaborative な Forum 環境が実現しない点である。本プロジェクトと類似の “Waste-Not, Create” は、リサイクルに主眼を置いて生徒たちが創造的な作品を順次紹介しコメントも出しやすい。その点、本プロジェクトは 2017 年度に唯一、台湾の Digital Poster への反響で盛り上がった例はあるが、“全体的”に地味で、努力した生徒たちの GOMI 調査への反応も鈍く、今一つ盛り上がり欠ける傾向にある。

そこで今後の対策として、パートナー制を導入し、Forum での協働学習を勧めたい。また ZOOM など教師間、生徒間で顔の見える関係を造り、Forum へ反映させ、今後の発展につなごう。

3. Hiroshima for Peace :Machinto

～広島絵本「まちんと」や「My Hiroshima」を使った平和教育～

高木 洋子 (iEARN & JEARN)

1945年8月6日、広島に投下された原子爆弾に被災し、泣きながらトマトを「まちんと」(広島地方の言葉で“もう少し頂戴”という意)と欲しがり、あの世に旅立った3才の女の子。絵本作家故松谷みよ子氏は、その逸話を基に絵本「まちんと」を著作、原水爆の恐ろしさ、悲惨さを世に訴えられた。海外の子ども達もこの絵本を介して、Hiroshima・Nagasaki を学び、平和への感性を国際協働学習環境の中で育てる教育である。

1 はじめに

2006年、絵本「まちんと」を介して世界中の子ども達に広島・長崎の出来事を伝えたいという松谷みよ子氏の思いと協力の下、iEARNプロジェクト「Machinto」を立上げ13年を迎えた。その後2014年広島に被爆者でもある絵本作家故森本順子氏の著作「My Hiroshima」を加え、その取組み内容を強化し今に至っている。

現在、プロジェクトの使用言語を英語とスペイン語として参加対象を広げ、プロジェクト参加国も29カ国に及んでいる。

参加国：[Albania](#), [Argentina](#), [Australia](#), [Brazil](#), [Canada](#), [China](#), [Colombia](#), [India](#), [Indonesia](#), [Iran](#), [Japan](#), [Mexico](#), [Moldova](#), [Morocco](#), [New Zealand](#), [Orillas](#), [Pakistan](#), [Paraguay](#), [Puerto Rico](#), [Romania](#), [Russia](#), [Slovenia](#), [Spain](#), [Sri Lanka](#), [Taiwan](#), [Tajikistan](#), [Tunisia](#), [Ukraine](#), [United States](#)

2 目的と方法

2-1 目的

「まちんと」「My Hiroshima」を介し、平和の大切さ、尊さを学習することにより、今日に至っても尚止まない戦いやテロに泣く多くの子ども達に笑顔が戻ることを念じ、両書を平和教育に資する教材として提供する。

2-2 方法

参加対象：6才～18才

使用言語：英語・日本語・スペイン語

Facilitators: Mali Bickley (Canada) & Jim Carleton
Kristin Brown (USA), Enid Figueroa (Puerto Rico)
Yoko Takagi (Japan) 連絡先: yoko@jearn.jp

<ステップ> 1. Join the Group

2. 2冊の本の受領

3. 参加生徒の iEARN 登録

4. Machinto Forums へ投稿

<https://forums.iearn.org/categories/g11-machinto-hiroshima-for-peace>

<Forum 紹介>

Machinto Project in Spanish

Introduction My Class

Chat room for students

Chat room for teachers

Machinto Students Works

!En Espanol!

New Discussion 7件

3 活動内容

● Argentina・Catalonia・Mexico・Puerto Rico

・Paraguay による Machinto Program in Spanish

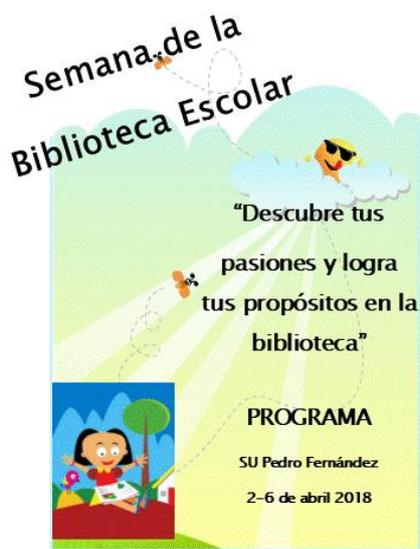
*Arlene from Puerto Rico





enthusiasm, and having shared with you the emotions and values we have discovered during the reading of the book, we would like to see **physical and scientific advances serve to help people and not destroy us and to the world where we live.** ”

*Jessica from Mexico



* Catherine from Argentina with Sadako story

MACHINTO 2017 – Argentina&Catalunya

Reflexión final de Formosa, Argentina

“Concluding this work with great illusion, we learned many things about the history of Hiroshima, it gave us goosebumps and we felt moved for everything those people had to go through. As a course, we express our concern through drawings and origami cranes trying to bring a message of peace to the world.”



Reflexión final de Salt, Catalunya

“After having worked, with great



* Catherine's students: Machinto from Spanish to English



● KNPS Harmeet from India: students with Machinto certificates at hands



* Margarita from Catalonia: Video Conference with Yoko



● Nina from Moldova



● Gina from Canada "Poems Peace"



* Jessica from Mexico
Learn about Fr. Arrupe in Hiroshima

●Dolphin from Taiwan “Peace Lanterns”



● iEARN Conference Machinto workshop at Morocco



4 成果と課題

2016年度に続いて2017年には、プエルトリコの Arlene 先生を中心に、カタロニアの Margarita、メキシコの Jessica、アルゼンチンの Catherine などスパニッシュの Machinto 活動が目を見守る。また、インド、モルドバ、台湾、カナダ、中国からの熱心な参加があった。

2015年に「まちなと」著者松谷みよ子氏が、また2017年9月には「My Hiroshima」著者の森本順子氏が亡くなられ、彼らの” Never Hiroshima/Nagasaki” を次世代に伝える思いを新たにしている。

残念なことは海外の参加国・参加校への対応を最も求められている日本の学校の参加が無く、最近増えている ZOOM を使ったビデオ会議依頼にも一人に対応している状況である。広島・長崎への認識とともに、国際協働学習の機会である本プロジェクトへの積極的な参加を期待している。



4. 防災世界子ども会議 NDYS 2017-2018

～気候変動と私たちの住む町の「防災・減災・復興」～

防災世界子ども会議実行委員会 実行委員長 納谷 淑恵
プロジェクト創設者 岡本 和子

防災世界子ども会議(以下 NDYS)は、ICT を活用した国際協働学習を展開する学びのイノベーション事業としてスタートし、2016 年 1 月より、国連 SDGs 実現に向けた取り組みをスタートさせました。2017 年には、モロッコで開催されるアイアーン国際会議・ユースサミットにて、NDYS2017in モロッコを開催しました。2018 年 7 月には、2016 年に続き再び新潟にて、NDYS2018 in 新潟(琴リニック協働開催)を開催します。

1. はじめに

阪神・淡路大震災から 10 年を機に「大震災の教訓を世界の子どもたちに伝えよう、命の尊さを考えよう！」と、ひょうごの子どもたちの交流から NDYS プロジェクトは始まりました。

「コミュニケーションが命を救う！」をスローガンに、災害が引き起こす惨状に目をむけ、子どもたちが、命を守る重要性に気づき、命を守る判断、行動、備えができることを目的として開催。NDYS2005 で、グローバルな防災教育ネットワークの基礎を築きました。これまでの参加国約 65 カ国・地域に加え、2017 年のモロッコ会議では、これまで参加の少なかったアフリカ各国の生徒を含む 15 カ国からの参加があり、より多くの国々に防災教育の輪を広げることができました。

2. 目的と方法

2-1 目的

NDYS は、世界と学び合う国際 協働学習を通じた防災教育の促進を目的とする プロジェクトです。インターネットをはじめとする ICT(情報通信技術)を活用して、世界の小 中高校の子どもたちが、さまざまな国・地域の 防災の知恵や災害から学んだ教訓に関する「情報」を共有し、学び合い、自然災害の「防災・減災・復興」という地球規模の課題解決に取り組み、その成果を 世界へ、未来へ発信する *iEARN の日本発プロジェクトです。

半年間のネット上の国際協働学習の後に、総仕上げとして「会議」をもちます。そのミッションは、地球規模の防災意識を共有しながら、持続可能な開発目標 SDGs に向けたそれぞれの国・地域の防災への取り組みに世界と共に取り組むことです。このため、ネットワークづくりを進めています。

2-2 方法

iEARN コラボレーション内の NDYS フォーラムでのディスカッションや、インターネットテレビ会議で互いのプロジェクト進行状況を報告し、協働学習を進めます。その後、プロジェクト発表会を持ちます。

対象：小学校・中学校・高等学校

NDYS2017 プロジェクト期間：

2016 年 9 月から 2017 年 8 月

NDYS2018 プロジェクト期間：

2017 年 9 月～2018 年 8 月

3. 活動内容

2017 年度の NDYS プロジェクトでは、モロッコで開催された第 23 回 iEARN 国際会議、第 20 回ユースサミットの中で「NDYS 2017 in モロッコ」を開催しました。これは、NDYS としては、初めての試みであり、モロッコの会議主催者の協力により成立したものです。

会議 4 日目の 7 月 20 日、教師向けのワークショップが、アイアーン国際会議内で行われました。神戸市立葺合高校によるパワーポイント

トを使ったプロジェクト成果発表に続き、心のケアとしての大正琴のワークショップも行われ、和気あいあいとした雰囲気の中でワークショップは終了しました。



Fig.1 教師向けワークショップ

その後、7月21日には学生向けのワークショップがユースサミットの中で行われました。

参加生徒は、アルジェリア、バングラデシュ、カメルーン、リベリア、マリ、パキスタン、パレスチナ、トルコ、ウガンダ、シエラレオネ、スリナム、ガンビア、アメリカ、日本そして開催国であるモロッコの15か国からの参加があり、これまで参加の少なかったアフリカからの参加が多かったのが特徴でした。

例年のプロジェクト発表に加え、地球規模の課題に取り組むには何が必要かなどを話し合い、それぞれの決意を3枚の大きな布に書き込みました。



Fig.2 それぞれのメッセージを書き込む

また、会議最終日には、全体の閉会式にて、NDYS2017 宣言文を発表することができました。

3-4 NDYS 2017 宣言文

「災害に立ち向かうには3つの段階で考える必要があると思います。

1つ目は、災害が起きる前です。私たちは災害の情報を共有することができます。それは実際に災害が起こった国の事例をもとに、自分達の住んでいる地域が安全かどうかを確かめることに繋がります。

2つ目は災害発生直後です。災害の起きた地域にいる人は支援なしで数日間持ちこたえなくてはなりません。そのため特に若い人が地域の復興に貢献していくことが求められます。そして、それと同じくらい大切なことは、災害の起きてない地域の人々や外国の人々が被災地域にメッセージを送って励ますことだと思います。

3つ目は災害発生後の長期的な活動です。災害の記憶を次世代に伝えて、次世代への教育という形で残すことは、将来の防災に役立てることができます。」（原案：石川県立金沢泉丘高等学校2年 清水 拓人）



Fig.3 宣言文発表の様子

4 成果と課題

アイアーン国際会議・ユースサミットにおいて防災世界子ども会議を行うことにより、これまで参加の少なかったアフリカの人々にプロジェクトを広げることができた。

また、NDYS 宣言文をアイアーン国際会議の閉会式で発表することにより、世界の国々の人々にNDYSの意義を理解してもらうことができた。この成果を2018年7月の新潟会議に活かすことが今後の課題である。

5. 第2回 世界大正琴交流大会 ‘琴オリンピック 2018 イン新潟’

テーマ 大正琴の輪は 未来を拓く 防災の輪 — 語り合えば 信じ合える —

アイアーン大正琴プロジェクト代表 廣田 元子

アイアーン大正琴プロジェクトは、2009年ジェイアーン理事会の承認を得て、2010年「アイアーン カナダ国際会議」からスタートした。

ICT (information and communications technology) を活用したグローバルな活動を推進し世界の子どもたちや、先生方の顔が見える国際交流、異文化交流学習を目指して活動をしている。主な活動は、世界各地での大正琴交流会開催、テレビ会議やホームページで会議をしたり、弾き方を紹介したりしている。訪問した国の学校や先生方に大正琴の寄贈等を行っている。「第一回世界大正琴交流大会琴オリンピック2016イン新潟」を開催した。

1 はじめに

アイアーン大正琴プロジェクトは2009年から大正琴の発祥の地、愛知県名古屋市から発信している。

大正琴プロジェクトは、2005年阪神淡路大震災記念事業として「防災世界子ども会議」が兵庫県で発足し、「防災世界子ども会議インひょうご」に世界から50人が招待され、淡路島の夢舞台で子ども会議が開催された。名古屋の小学生達と2003年9月からプロジェクトに参加し、初めて防災教育について勉強をする機会を得、その後、台湾会議を経て防災教育の重要性を感じ、2007年には愛知県開催に手を挙げ実行委員長としてロシア、イラン、インドネシア、ネパール、トルコ、スロバキア、アメリカ、台湾から68人を招待し、「愛知県美浜少年の家」において、5月3日～5日の「防災世界子ども会議 2007 インあいち」を開催した。実践を続ける中で、「災害はいつ起こるか分からない。起こった時に落ち着いて自分の『心のケア』ができる何かを持っていなければ生きられない」と感じ、「防災教育 音楽の力 心のケア」を生涯教育と絡み合わせて探るうちに大正琴に辿り着いた。これがプロジェクトとの立ち上げのきっかけである。

2014年5月からは新潟市に本部を置く琴オリンピック実行委員会と防災世界子ども会議実行委員会と協働で活動をし、2016年には「第1回世界大

正琴交流大会 琴オリンピック 2016 イン新潟」を開催し、世界から約100人の子どもたちと先生を招待し、大正琴の演奏交流発表と防災子ども会議が開催された。

2018年は「第2回世界大正琴交流大会琴オリンピック 2018 イン新潟」が7月22日(日)に新潟市りゅうとぴあコンサートホールで開催される予定。

2 目的と方法

2-1 目的

- ① 「世界に大正琴の輪を広げよう」
- ② 「大正琴の輪は 未来を拓く 防災の輪」
- ③ 「語り合えば 信じ合える」

3つのテーマで活動をしている。

2-2 方法

①の活動方法：国内のみならず国外の小中高等学校及び、幼稚園、大学や一般のサークル等の授業やクラブ活動、イベント等に大正琴を組み込み大正琴の輪を広げる実践をする。

②の活動方法：音楽の力と、自分の命を守る方法を考える会議の開催。

③の活動方法：テレビ会議をはじめとするICT (情報とコミュニケーション技術) を活用した新しい仕組みで、各国と大正琴交流や防災会議。

3 活動内容

海外へ大正琴贈呈数 2014～2018年4月現在

日本全国から寄贈された大正琴445台。メンテナンス後海外へ贈呈221台

2014 年 11 月までで、70 台を清掃、メンテナンス
12 月 13 ～ 17 日で、延べ 35 名のボランティア
で 54 台を清掃、メンテナンス

2015 年 2 月現在 90 台、4 月現在 120 台、9 月
現在 180 台…10 月総数で 200 台突破。10 月 12
日、17 名のボランティアで 20 台の大正琴を清掃、
メンテナンス。

2016 年 1 月現在 236 台、2月 240 台…

2016 年 6 月 12 日 25 台の大正琴を清掃、メンテ
ナンス。

2017 年以降、送られてきた大正琴を順次メンテナ
ンス、合奏用や電子大正琴は保管、壊れていて修
復不可能なものは部品取りとして使用。

2018 年の琴リンピックで 100 台寄贈予定。

献琴に協力した都道府県

北海道 岩手県 秋田県 福島県 埼玉県 神奈
川県 新潟県 静岡県 愛知県 滋賀県 大阪府
兵庫県 奈良県 島根県(20県)

贈呈した国

中国 イラン インドネシア ロシア オランダ イン
ド ベトナム モンゴル フィンランド コロンビア ア
メリカ オーストラリア トルコ ネパール ブルガリ
ア イタリア マレーシア マリ(アフリカ) 台湾
日本 モロッコ シンガポール

訪問した国 ※別紙参照

2016 年 9 月 17 日～ 21 日 台湾



2017 年 7.17 ～ 22 第 23 回アイアーン国際会議
& 第 20 回ユースサミット イン モロッコ



2017 年 8/24 ～ 29 新潟モンゴル領事館開設
10 周年記念南モンゴルの旅&ウランバートル学
校訪問

2018 年 1/16 ～ 20 新潟シンガポール協会の
「シンガポール経済ミッション」

2018 年 3/1 ～ 3/9 新潟オーストラリア協会の
「設立 5 周年記念旅行」に参加

2018 年 4 月 5 日～マレーシアのクアタンの学校
訪問にてワークショップその後シンガポールで発表



4 成果と課題

成果としては、訪問した学校は必ず琴リンピック
に参加し、大正琴の輪が広がっていくのを実感す
る。次の琴リンピックは 2020 年の予定であるが、新
潟県の海外用の支援が 2 回までなので次は自力
で資金を集めなければならないのが課題である。

6. “Girl Rising Project”の実践

— 高3年生選択授業・「国際理解」 —

関根真理(啓明学園中学校高等学校)



国連が2030年までに、世界のすべての国々が達成すべき目標として掲げている持続可能な開発目標(SDGs)には、目標4「質の高い教育」と目標5「女性の人権」が17の目標に含まれている。「誰一人取り残さない」がキャッチフレーズになっており、女子教育の大切さは世界の人々と共に解決しなくてはならない目標となっている。

1. はじめに

マララさんの勇気ある行動に共感し、iEARNのCollaboration Centerに新しいプロジェクトとして女子教育の大切さについてお互いに学びたいとTeachers Forumに投稿したのが始まりである。2014年より、iEARNのEd Grager氏と共に、Girl Risingのファシリテーターとなり、女子教育の大切さを学ぶ機会を促進するための活動をしている。勤務校では、高校3年生選択授業・「国際理解」で、毎年Girl Risingを通して世界の生徒と協働学習を実施している。

2. 目的と方法

始めに、9ヶ国(カンボジア、ハイチ、ネパール、エジプト、エチオピア、インド、ペルー、シエラレオネ、アフガニスタン)の少女たちの置かれている現状をDVD(映像)を通して知り、それぞれの問題を学んでいく。次に、これらの問題を解決する為に、生徒たちは具体的にそれぞれの問題について学び、理解を深め、解決方法を模索する。その後、iEARNのGirl Risingのフォーラムに投稿し、他国の生徒とお互いに気づいたこと、学んだことを共有し、協働学習をする。生徒同士は投稿だけでなく、スカイプ会議を実施し、お互いの国の現状や学ぶ機会についても可能である。さらに、課題を解決するために立ち上げたプロジェクトなどについて紹介し、成果を共有し合うことも可能である。

3. 活動内容

2017年度は、高校3年生選択授業「国際理解」の生徒、35名がGirl Risingのプロジェクトに参加した。1学期にアメリカ、カリフォルニア州のSunburst Academyの高校3年生と、ネパールとインドの少女のストーリーを通して協働学習をした。

ネパールの映像を通して、どのような学びがあったかについて紹介する。ネパールの少女Sumaは、幼い時から女子であるということと両親から差別を受ける。兄は学校に行き教育を受けられたのに対し、他人の家に送られ、強制的に児童労働をさせられる。これは、現在も実在する“Kamlari”という昔からの風習である。現在違法となっているが、親に借金があると現在も多くの女子が児童労働を強いられている。Sumaは、幼い時から何件かの家で児童労働をさせられるが、16歳の時に夜間に学ぶことが許される。その後、ソーシャルワーカーの協力で、Kamlariは違法であることを何回も訴え、ついには解放される。その後、Sumaは同じ境遇にある女子が解放されるために、立ち上がる。

映像を観た後、生徒たちは女子の人権が守られないのはおかしい、教育を受けられないのは不平等だ、ネパールの風習について他国は介入することができるのか、違法であっても継続されている風習について、自国の人々はどういうようにしてこれらの問題を解決することができるかなどについて活発な意見交換をした。その後行われたスカイプ交流では、Girl Risingの内



《スカイプ交流》

容だけではなく、両国の男女差別および児童労働の有無、教育の格差および高校生活の内容についても紹介し合った。

2学期は、アメリカの高校だけではなく、イスラエル、モロッコの高校生と共に協働学習をした。事前に打ち合わせをして、同時期に各学校で、アフガニスタンとペルーの少女の映像を観ることにした。

アフガニスタンの少女 Amina からは女性差別と早期結婚の問題をペルーの少女 Senna からは児童労働について問題があることを確認し、気づいたこと、学んだこと共有し、意見を交換した。その後、特に大切だと思ったことをポスターにして、動画でプレゼンしあい、学びを共有した。



《アメリカの高校生》



《イスラエルの高校生》



《モロッコの高校生》

4 成果と課題

授業を通して、生徒たちは各国の少女たちが置かれている現状を映像で学び、それらの問題についてより身近に感じるようになった。紹介されている少女たちは、大きな困難の中にあっても諦めず、自分たちの夢を達成するために立ち上がり、行動する。その姿と協働学習を通して、生徒たちは勇気と力を得て、自分たちも何かしなければという思いになる。Girl Rising のムーブメントは、このプロジェクトに参加する生徒たちが力強い地球市民になるように力づけることの相互の繋がりも生み出すきっかけとなる。

また、DVD を英語で視聴し、フォーラムで英語で感想やプロジェクトを紹介することによって、英語力を向上させることも出来る。したがって、言語スキルおよび情報スキルを身に着けることが可能である。

課題は、異なる年間行事の中で、他校と協働学習をすることになるので、相手校とのスケジュール調整することである。そのためには、3ヶ月から半年前からの準備が必要となる。

7. My Name プロジェクト

～iEARN ”My Name Around the World” を「深い学び」に繋げる試み～

阿部志乃（横須賀学院小学校）

iEARN のプロジェクトを、小学校の新学習指導要領が目指す「深い学び」に繋げる試みを報告する。古代の人が伝えたかったものを想像する活動を通して、文字と絵の違い、地球上に存在する言語や文字の多様性、文字や名前の必要性、名前に込められた意味や想いに児童は気づいていった。また、日本語が分からない相手を意識した作品作りをすること、言語や文字は違っても与えられた名前は誰にとっても特別なものである事を、iEARN のフォーラムを通じて感じる事ができた。

小学校外国語 プロジェクト学習 異文化理解 国際理解 教科横断型

1 はじめに

このプロジェクト学習は、iEARN の”My Name Around the World”を、文字の起源や世界中の文字に触れられるようアレンジしたものである。古代の遺物を観察し、「文字と絵はどう違うのか」「名前とは何か」について考えることは、なぜ私たちは言語を学ぶ必要があるのか、児童自身で気づき、考える機会を与える。その言葉のルールに気づき、何を伝えたかったのかを想像する体験は、児童に「言語」というものに対する関心と探求心を掻き立てさせ、日本語、外国語を問わず言語について学ぶ動機づけにも繋がると考えられる。

さらに iEARN のフォーラムには世界中の子どもが書いた文字や作品が投稿される。フォーラムを通して様々な名前に触れ、誰にとっても名前は特別なものであることを意識し、相手の意見や表現に心を開く態度、他者の視点を理解する機会にもなり、異文化理解に関心のある子どもを育てることに繋がるのではないかと考えた。

2 目的と方法

2-1 目的

プロジェクトのゴールは「自分の名前を題材にオリジナルカードを作りフォーラムで発表する」である。そのゴールを目指す活動の過程で、教師の狙いを以下のように設定した。

- 1) 絵と文字の違いや、名前に意識を向ける。
- 2) 世界中には様々な文字があることを知って、

日本語の特徴にも気づく。

- 3) 他者を意識した作品作りをする。
- 4) 作者を尊重して作品を鑑賞し、誰にとっても名前は特別なものであることに気づく。

2-2 方法

本実践は横須賀学院小学校の4年生(36名)で2017年4月から6月に実施した。オリジナルのネームカードをただ作って終わりではなく、自分の名前について意識を高める活動、そのために名前を構成する文字に注目させる活動を入れたら面白いのではないかと考えた。

そこで、文字に注目するために「文字って何だろう?」と考えさせる活動から始めることにした。また、日本語と日本語以外の言語の比較は、相手を意識した作品作りにつながると考えた。そのため、図書室の司書と相談をし、調べ学習では児童が自由に様々な言語に触れられるように、文字に関連する書籍を数多く用意した。授業時数は8時間、4つのユニットに分け、最後の作品作り以外は全ての活動をグループで行った。作成した作品はiEARNのフォーラムで発表した。

3 活動内容

1) 文字って何だろう?絵との違いは?

文字を意識させるためには、文字かどうか分からないものをみんなで考えてみる、という活動が適している。そこで、古代の遺物「タルタリアのタブレット(Tartarian Tablet)」の写真

を観察した。何だか分からないものを見て「これは文字だろう、絵だろうか?」と考えることは、文字について児童自身がどのように捉えているのか気づくことに繋がる。文字なのか、文字ではないのか、その理由を発表する事で児童に「文字とは何か」を考えさせるきっかけとなった。この活動の最後に「文字と絵の違いは何か?」を自分たちの言葉でまとめた。「絵は誰でも描ける、文字は勉強しないと・覚えないと書けない」「文字は誰が書いても同じ意味、絵は描く人・見る人によって違う」「文字は国で決まっている」などという意見が出た。

2) 名前って何?もし名前がなかったら?

次に、記録として(文字として)残る世界最古の名前、約紀元前3000年にエジプトにいたとされるナルメル王の遺物(Narmer Palette)を取り上げた。絵としてではなく記号として使われている=文字の特徴に気づき、エジプトのヒエログリフについて学んだ。「名前とは何か」考えた際、「その人の大切な物」「世界で1つしかない物」「自分だと証明できる物」「願いや想いが込められた物」という意見が出た。

3) 調べ学習

児童の興味や関心に合わせて、自由に文字を調べたり文字で遊んだりする時間を作り、グループごとにテーマを決めて調べ学習を行った。自分の名前を様々な文字で書いてみる活動や、文字のご先祖探し、文字と言語の繋がり、様々な文字と日本語の文字の比較を行い、日本語は4つの文字(漢字、ひらがな、カタカナ、ローマ字)を使い分けており、これは世界的にも珍しいことなどに気がつくきっかけが生まれた。

また自分の名前の由来や生まれた時のエピソードを家族に取材し、自分の名前について調べ学習も行なった。自分が知らなかった家族の想いを知る良い機会となった。

4) 自分の名前カードを作り発表

プロジェクトのゴールとして、今まで調べて集めた情報を元にして自分の名前カード作成し、発表した。iEARNのフォーラムに発表するという目標を与えることで、児童が他者(日本語がわからない相手)を意識した作品作りに繋

げることができた。また、フォーラムに投稿された様々な作品を鑑賞することで、日本とは違う文化を感じる一方、名前は世界のどの人にとっても特別なものであり、様々な思いや願いが込められていることに気づく機会に繋がった。最後にカードを作った時の工夫点や感想、さらには他の人のカードを鑑賞しての感想をまとめ、プロジェクトは終了した。

4 成果と今後の展望

ネームカードを作る前に、古代の人が伝えたかったものを想像する活動を通して、文字と絵の違いは何か、地球上にはどんな言語や文字があるのか、文字や名前はなぜ必要なのか、名前に込められた意味や想いに児童は気づいていた。また、文字の持つ機能と働きを考えると、世界の言語と文字の多様性を知ること、それらとの比較を通じた日本語の特徴に気づくことは、日本語が分からない相手を意識した作品作りに繋がった。さらに、iEARNのフォーラムを通じ海外の作品を鑑賞することで、相手の言語や名前に興味を持ち、与えられた名前は誰にとっても特別なものであることを感じるようになるようになっていった。

小学校学習指導要領解説 外国語編(2017)では、「深い学びの鍵」として「見方・考え方」を働かせることが重要であるとし、外国語科の見方・考え方において、「外国語やその背景にある文化を捉えることを、小学校の段階では重視すべきである」と述べている。しかし、学習指導要領の内容をみると、英語の特質を踏まえた「聞くこと」「読むこと」「話すこと[やり取り]」「話すこと[発表]」「書くこと」の五つの領域別に設定する目標の実現を目指すことがメインであり、外国語やその背景にある文化について触れる具体的な記述は見当たらない。iEARNが提供するプロジェクトは、外国語やその背景にある文化を捉えるきっかけを現場にもたらし、外国語科での深い学びにも繋げることができ、さらに学習指導要領の中では詳しく具体的な記述がない「学びに向かう力・人間性等」にも繋がると期待できる。

8. 青少年ペンフレンドクラブ(PFC)

—海外文通の取組—

日本郵便株式会社 本社 切手・葉書室
青少年ペンフレンドクラブ

「Peace (平和)」「Friendship (友愛)」「Culture (教養)」という三信条をモットーに、日本国内はもとより世界中の友達と手紙を交換しながら世界で起こる様々なことを知り、平和な社会をつくることを目的とするクラブである。1949年6月に郵便友の会として発足し、現在は手紙文化振興という観点から、弊社が運営している。

1. はじめに

手紙を通じた国際交流活動の促進として、iEARN(アイアーン)及びJEARN(ジェイアーン)のネットワークで展開するPFC海外文通プロジェクトにアプリケーションフォームを掲載し、児童・生徒のペンパルリストを入手、PFC会員との海外文通活動に取り組んでいる。

2. 目的と方法

2-1 目的

手紙のやり取りを通して、国際親善、国際理解、相互理解の促進に努めることを目的としている。

2-2 方法

具体的方法として、毎月発行の会報誌「レターパーク」の海外ペンパル紹介コーナーに国名、名前、年齢、趣味・文通希望相手など、申込数に応じて毎回、20～100名程度を掲載。様々な年代のPFC会員からの希望に応じて、相手の連絡先をお知らせして手紙の交換を行っている。

3. 活動内容

2017年度(2017年4月～2018年3月)においては、iEARN及びJEARNのネットワークを通じて得た246名の海外ペンパルリストを会報誌「レターパーク」に掲載し、PFC会員からの文通申込みは125件であった。(別紙参照)

4. 成果と課題

昨年度に引き続き本年度もiEARN及びJEARNのネットワークから多くの方をご紹介いただき、日本の小・中・高校生を中心に、手紙のやり取りを通じた海外交流の橋渡しができた。また、過去に文通相手の募集を行った学校からの再掲載・追加掲載依頼も続いているほか、iEARN会員の友人・知人からの申込みも見受けられ、当プロジェクトの活性化に繋がっている。

しかしながら、学校団体による大人数の募集申込みに対し、PFC会員情報誌「レターパーク」の誌面等からPFCグループ等団体に文通申込みを呼びかけているが、現状、反響が若干数に留まっているため、検討が必要。

また、次年度もより多くのPFC会員が海外文通への興味を示し、文通申込みに結び付けられるよう、PFC会報誌等を用いた英文手紙の文例や諸外国の文化や伝統の紹介、海外文通実践者による「私の海外ペンパル」掲載を引き続き実施したい。

5. 2018年度の取組

2018年度目標紹介数2,000件に向けて、PFC会報誌等を通じてPFCグループに海外文通への取り組みを働きかける。

また、PFC会報誌やPFC Webサイト等の内容充実化を図ることで、海外ペンパル掲載ならびに紹介件数の増加に繋げる。

青少年ペンフレンドクラブ

2017年度 海外文通の取組 iEARN からお申込みに対する紹介数

掲載号		国名	学校名	紹介人数
2017年	4月号	スロベニア	Primary School Antona Ingolica Spodnja Polskava	11
	5月号	台湾	Zhuwei High School	9
	6月号	スロベニア	Primary School Antona Ingolica Spodnja Polskava	7
	7月号	スロベニア	Primary School Antona Ingolica Spodnja Polskava	1
	8月号	スロベニア	Primary School Antona Ingolica Spodnja Polskava	4
	10月	スロベニア	Primary School Antona Ingolica Spodnja Polskava	3
2018年	2月	台湾	Jing Long Elementary School	48
		ベラルーシ	Mogilev Secondary School	13
	3月	スロベニア	Osnovna šola Miroslava Vilharja Postojna	24
		台湾	Tainan Kuang Hua High School	5
	合計	3カ国	6校	125

9. 大学を拠点としたHoliday Card Exchange プロジェクトの実践

栗田智子（実践女子大学短期大学部）

実践女子大学・実践女子大学短期大学部を拠点として、小・中学生を対象としたHoliday Card Exchange プロジェクトのワークショップを行った。ロシア、メキシコ、スペイン、ルーマニア、スロベニア、台湾の8校と手作りのホリデーカードの交換を通して、小・中学生は異文化コミュニケーションの楽しさと海外の多様な文化と自国の文化を学んだ。また大学生はワークショップの企画運営を通し、国際的視野とコミュニケーションスキルの向上がみられた。

1. はじめに

子どもたちの国際協働学習を提供するため、2015年から小中学生を対象としたHoliday Card Exchange プロジェクトのワークショップをイベント形式で行ってきた。2016年度から、JEARN Youth Project として、実践女子大学短期大学部の学生がファシリテーターとなり、小中学生に国際協働学習を体験してもらう形態をスタートさせた。2017年度は、学生がより主体的に企画運営することを目指した。

2. 目的と方法

2-1 目的

- 1) 日本の小中学生が、海外の生徒とホリデーカードの交換を通して、自国と他国の文化を相互に学び、異文化コミュニケーションへの興味、国際的視野を培う
- 2) 日本の大学生が、国際協働学習のワークショップの企画運営を通じて、国際的視野を養い、コミュニケーション力を向上させる。

2-2 方法

- 1) Holiday Card Exchange プロジェクトに参加
- 2) パートナー校：台湾、ルーマニア、スロベニア、ロシア、スペイン、メキシコの6か国、計8校
- 3) ワークショップタイトル：「世界のお友達とホリデーカードを交換しよう！～Holiday Card Exchange Project 2017」

4) ワークショップ企画・運営：実践女子大学短期大学部学生21名 実践女子大学学生2名

5) 活動期間：2017年10月から1月

- ① ワークショップの内容の検討と作成
- ② ワークショップ3回の実施
- ③ ワークショップの振り返り

3. 活動内容

3-1 ワークショップの内容の検討と作成

2016年度の資料をもとに、チラシ作成からワークショップ内容、ビデオレター作成までの作業内容を、3グループに分かれ企画した。

3-2 ワークショップの実施

実践女子大学渋谷キャンパスで、以下のように3回行った。

第1回：11月28日（日）13時～16時

参加者16名（7歳～13歳）

- ① 大学生の作ったクイズに答え、パートナー校の6か国の場所や有名な物を知り興味を持たせる。
- ② 日本のお正月の伝統文化について学生が説明し、その後プロによる獅子舞のワークショップを体験。
- ③ 日本のお正月の文化を伝えるビデオレターの撮影。獅子舞、子ども達がお正月に関するものを持って英語で紹介、お正月の歌

の合唱の3部構成の映像を大学生が撮影編集し、海外のパートナー校へ送る

- 参加した子どもの感想:「いろんな国の旗揚げクイズでは、いろんなことを学びました。日本の獅子舞を見てとても面白かったです」、「海外のことが分かって面白かった。ビデオレターが海外から届くのが楽しみ」
- 保護者の感想:「ビデオレターを海外に向けて送るのは面白い」、「海外の人と友達になるためには、まず日本のことを知る必要があることを気づかせていただきました」



写真1 学生によるクイズに答える

第2回: 12月17日(日) 13時~16時
参加者27名(7歳~13歳)

- ① 海外から届いたカードを一人一人が受けとる
 - ② 大学生が作成し海外の学校に送ったビデオレターや、台湾から届いたビデオレターを鑑賞する
 - ③ 海外のパートナー8校の国の文化や挨拶ことばについてクイズに答える
 - ④ 日本のお正月文化についておさらいする
 - ⑤ 海外の学校に送る年賀状を子どもたちが作成する
 - ⑥ 年賀状をパートナー校に郵便で発送し、年賀状作成の様子を撮影したビデオレターをパートナー校にメールで送る
- 参加した子どもの感想:「嬉しかった。一人一人自己紹介をされていて誰から届いたのか分かった。」「一生懸命色々なことをしているとしました。」「色々な国の人に英語で年賀状を書けてよかったし、絵やシールを

貼ったりして楽しかった」「自分が一生懸命書いたものが、相手に届くと思うと楽しみになった」

- 保護者の感想:「子供が世界に目を向けるこのような機会は子供にとって大変有難い体験になっていると思います。」「一緒に手伝ってくださった大学生の皆さん、とても優しく接していただき感謝いたします。また会を進行する手際もよくとても勉強になりました。」



写真2 英語で、年賀状を書く

第3回: 1月28日(日) 13時~16時
参加者15名(7歳~13歳)

- ① 第2回の活動を紹介したビデオレターを見る
- ② 海外のパートナー校から届いた写真を見る(日本から送った年賀状へのお礼)
- ③ 6か国のパートナー校から届いたホリデーカードをじっくり鑑賞し、気づいたことや感じたことをシートに記入する。わからないところはファシリテータの学生に聞いたり、タブレット端末で調べたりする。
- ④ ホリデーカード交換をしてわかったこと、感じたことをグループごとに模造紙に書いて、発表する、
- ⑤ 海外から届いたカードを持って写真撮影
- ⑥ 海外から届いたカードやグッズをおみやげにもらう、
- ⑦ 3回のワークショップすべてに参加した子ども8名に参加修了証、ボランティアで貢献した学生15名にもボランティア活動修了証を授与。



写真3 海外からのカードを観察する

- 参加した子どもたちの感想:「いろいろな国のことばが学べて楽しかった。」「6カ国の文化や有名な食べ物などいろいろなことが分かり、とても楽しかった。」「いろいろな国のクリスマスの過ごし方や文化を学び、日本と違うところをたくさん見つけられた。」「どの国も家族や友だちを大切に思っていることが分かった。みんなのカードを見るのがとても楽しかった。」
- 保護者の感想:「普段の生活で交流のない国々の人たちとメッセージカードを通していろいろ触れあえて本当に良かったと思います。」「外国の文化に興味を持って世界に目が向くきっかけになったと思います。」「大人よりも身近な学生さんに関われることで、力を抜いて参加できたと思います。」



写真4 グループで発表

3-3 ワークショップの振り返り

ワークショップ終了後、アンケートを行い、学生の自己評価（1-5段階）と良かった点、改善すべき点を記入してもらった。

4 成果と課題

4-1 小中学生

小・中学生の参加者と保護者のアンケートから、海外の様々な文化を学べたこと、英語を使ってカードを書いたり、海外からのカードを読んだりして、異文化コミュニケーションの楽しさを体験できたことがうかがえた。異文化や外国語への興味を持つきっかけとなったという保護者の声も多かった。

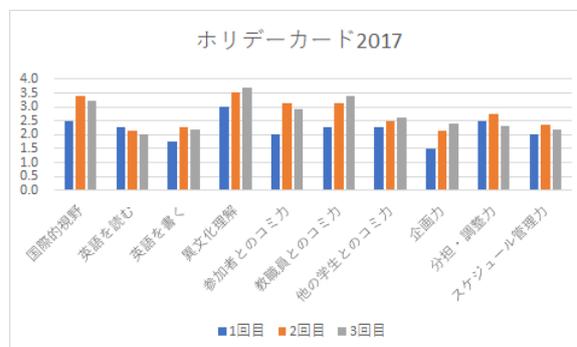


写真5 タブレットで調べる

学校と違い、年齢の異なるメンバーで構成されたグループで、協力しあい、タブレットを使って調べる姿も頻繁に見られた。課題としては、ワークショップの時間内で、一人3枚カードを書くことが負担であるという声があったので、次回は改善したい。

4-2 短大生、大学生

大学生の成果と課題であるが、学生へのアンケート結果（三田薫教授まとめ）からは、「国際的視野」「異文化理解」「参加者とのコミュニケーション力」「教職員とのコミュニケーション力」の自己評価が、伸びていることがわかった。（グラフ1）このワークショップを通して、自分の成長を感じたと感想を述べた学生が多かった。



グラフ1 学生の自己評価の推移

この活動は大学の授業ではなく、学生がボランティアで行なっているため、ミーティングとワークショップのすべてに参加できる学生は限られており、学生主体で企画運営することは、容易ではなかった。特に情報の共有とワークショップ全体と自分の作業の関連付けがうまくできなかったことで、苦勞した面も見られたが、会を追うごとに、学生の仕事への責任感、仕事の連携のために学生同士が積極的にコミュニケーションをとる姿勢が見られるようになった。ワークショップに参加できなくても、ホリデーカードの翻訳作業を行うなど、様々な関わり方ができることがわかった。今回の経験をもとに、学生が責任感を持ち主体的に関われるよう、次年度に工夫をしていきたい。

最後に、この活動と研究に、実践女子大学短期大学部三田薫教授と大塚みさ教授の多大なるご協力があったことに感謝したい。

Tokyo Youth Project

10 Origami プロジェクトを通じた台湾との交流

～大学と小学校放課後クラブとの連携～

栗田智子（実践女子大学短期大学部）

Tokyo Youth Project の活動として、実践女子大学短期大学部の学生がファシリテーターとなり、Origami プロジェクトのワークショップを近隣の区立小学校の放課後クラブの子どもたちを対象に行った。パートナー校である台湾の小学校と連絡をとりながら、互いの折り紙作品をフォーラム上で共有し友好を深めた。本プロジェクトの事前事後のループリック調査で、短大生のコミュニケーションスキルなど10項目の自己評価が高まったことがわかった。

1. はじめに

Holiday Card Exchange 2016 のワークショップを実践女子大学短期大学部教育プロジェクトと JEARN Tokyo Youth Project が共同開催した時のパートナー校である台湾の小学校から、個別にプロジェクトと一緒にやりたいとの要請があり、Origami プロジェクトと一緒にやることになった。実践女子大学短期大学部教育プロジェクトの学生が、近隣の小学校の放課後クラブに出張する形でワークショップが行われた。

2. 目的と方法

2-1 目的

- 1) 日本の小学生と台湾の小学生の国際交流を行い、互いに友好を深める。
- 2) グローバルプロジェクトを通して、短大生の企画力、コミュニケーション力、海外への発信力を培う。
- 3) 日本の文化である「折り紙」の良さを発見する。

2-2 方法

短大生がワークショップ内容を企画し、2ヶ月間にわたり、近隣の小学校の放課後クラブを訪問し、折り紙プロジェクトの出張ワークショップを3回実施した。

ワークショップ実施者：実践女子大学短期大学

部学生7名

ワークショップ対象校：渋谷区立常盤松小学校

期間：2017年4月から5月

- 1) ワークショップの内容の検討と作成
- 2) 日本の小学校でのワークショップの実施
- 3) 台湾の小学校とのオンライン交流

3. 活動内容

4月28日（金）折り紙プロジェクトミーティング

5月1日（月）常盤松小学校で折り紙プロジェクトワークショップ

5月8日（月）常盤松小学校で折り紙プロジェクトワークショップ

5月11日（木）折り紙プロジェクトミーティング

5月22日（月）常盤松小学校で折り紙プロジェクトワークショップ

学生の話合いの結果、折り紙を折るだけではなく、折った後で仲間とその折り紙で遊び、コミュニケーションを生むことができる折り紙を台湾の小学校に紹介することにした。そこで「カエル」と「お相撲さん」の作り方と遊び方をフォーラムで紹介した。他にも小学生の折り紙作品を作った。互いに折った作品や折り紙で遊ぶ様子の写真を投稿しあった。短大生が、折り紙を紹介したビデオレターを作りフォーラムに

投稿した。オンラインでの交流の他に、交流先の台湾の小学生が6月に卒業することがわかったので、卒業のお祝いに、サプライズで日本からメダルの折り紙を郵送した。



写真1 日本の小学生が折った「カエル」

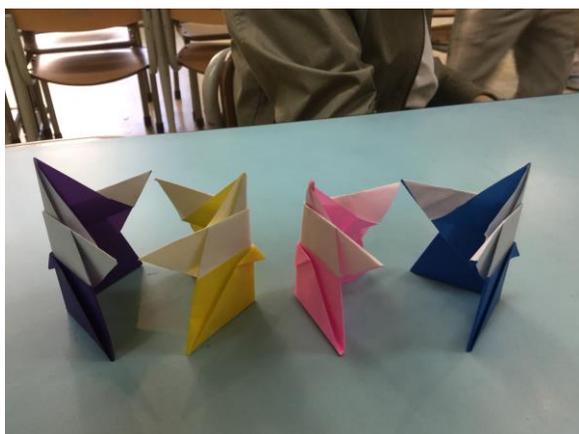


写真2 日本の小学生が折った「お相撲さん」



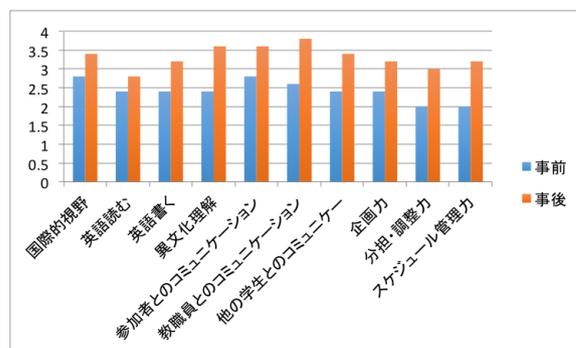
写真3 「お相撲さん」で遊ぶ台湾の小学生

の小学生の間に、友情を育むことができたと思う。台湾の先生が、伝統行事にまつわる粽のキーホルダーを日本の小学生と短大生に送ってくれた。

短大生の感想:「台湾から送られてきた写真を見て、折り紙という文化が広まっているんだと感じることができ、嬉しいです。他の国にも折り紙を広めたいと思いました。」

「自分たちでカエルを折るって決めて、台湾の子が折ってくれた写真を見たときは嬉しかったし、つながっている感じがした。」

今回、このプロジェクトの事前事後で、短大生にループリックで10項目について自己評価をしてもらった。結果は、「国際的視野」「英語読む」「英語書く」「異文化理解」「参加者とのコミュニケーション」「教職員とのコミュニケーション」「他の学生とのコミュニケーション」「企画力」「分析・調整力」「スケジュール管理力」の10項目すべてにおいて事後のスコアに向上がみられたが、特に「教職員とのコミュニケーション」と「スケジュール管理力」が最も高まった。



グラフ1 事前事後の自己評価比較

短大生がファシリテーターとなり、グローバルプロジェクトのワークショップを小学校の放課後クラブで行う形態は、小学生に世界と繋がる体験を提供できると同時に、短大生の企画力、コミュニケーションスキルやスケジュール管理力などの向上に役立つものと思われる。今後も機会があればチャレンジしたいと思う。

4 成果と課題

2ヶ月間の短い交流ではあったが、台湾と日本

11. アイアーンプロジェクトを使った短大英語授業

栗田智子（実践女子大学短期大学部）

実践女子大学短期大学部の必修英語授業において、4つのアイアーンプロジェクトを導入し、「祝日」「食物」「教育」「環境」のトピックで、ライティング指導を行った。3種類の訂正フィードバックを提供しながら、学生グループにエッセイを書かせ、アイアーンのフォーラムに投稿させる活動を行なった。

1. はじめに

実践女子大学短期大学部1年生の必修科目インテグレートドイングリッシュは、日本人英語講師とネイティブスピーカーの英語講師がそれぞれ週1回15週教える必修コースで4技能を向上させることを目的としている。

グローバル化が進み、英語の発信力向上が求められる中、今回4クラス全てにおいて、4つのアイアーンプロジェクトを導入し、Holiday, Food, Education, Environment のトピックで、日本人講師のクラスでは、ライティングを指導しアイアーンのフォーラムに投稿、ネイティブの講師のクラスでは、同テーマでプレゼンテーション指導を行ない、英語での発信力の向上と国際的視野の向上を目指した。ここでは日本人クラスでのライティングの取り組みを報告する。

2. 目的と方法

2-1 目的

- 1) 英語を使って、日本の文化や自分の意見を海外へ発信する力をつける。
- 2) 教室の外の世界とつながることで、リアルなオーディエンスを意識したライティング力をつける。
- 3) 国政的な視野を養う。

2-2 方法

- 1) Holiday Card Exchange, Global Food Show & Tell, Girl Rising, International Book Club の4つのアイアーンプロジェクトに参加する。

- 2) プロジェクト実施のためのハンドブックを作成する。
- 3) リサーチ、ドラフトライティング、ドラフト修正、投稿のプロセスに従ったライティングの指導をする。
- 4) 上記のプロセス中に、3種類の訂正フィードバックを提供する。
- 5) フォーラムに投稿された他国のコメントを読む。
- 5) グループ活動の進捗状況を学生が記録する「プログレスシート」を作成する。

3. 活動内容

以下の4つのアイアーンプロジェクトに参加し、フォーラムでの投稿を通して海外と交流を行う。

3-1 Holiday

Holiday Card Exchange プロジェクトに参加する。各グループは、日本の祝日の一つを選び、その由来や伝統を調べ、英語で説明したカードを作成する。秋に Holiday Card Exchange プロジェクトのパートナー校へ、小・中学生が書いたカードとともに郵送する。

3-2 Food

Global Food Show & Tell プロジェクトに参加する。各グループは、日本の料理の一つを選び、その料理の写真と作り方を英語で書き、フォーラムに投稿する。

3-3 Education

Girl Rising プロジェクトに参加する。ネパ

ールとペルーの指定のビデオを見て、グループで意見をまとめる。その意見を英語でフォーラムに投稿する。

3-4 Environment

International Book Club プロジェクトに参加する。環境に関する本の紹介をフォーラムに英語で投稿する。



写真1 学生が作ったホリデーカードの一部

4 成果と課題

4-1 ライティングスキル

事前事後のライティングテスト（10分間）で書いた語数を比較したところ、4クラス全てで、顕著に語数が増加した。もっとも語数が伸びたクラスの結果は、事前テストで、平均39.31語が、事後テストで、平均89.21語に増え、100語以上書いた生徒が、事前テストでは0名であったが、事後テストでは、11名に上った。「流暢さ」の改善に効果が見られたが、今後は「正確さ」についても調査が必要と思われる。

4-2 学生の授業への満足度

4クラスのアンケート調査から、高い満足度が示された。4クラスの「とても満足」「満足」の合計は、全体の98.2%であった。

4-3 アイアーンについて

4クラスのアンケート調査で「アイアーンに投稿するという活動は、自分の英語力向上に役

立ちましたか？」という問いに対し、「とても役立った」「役立った」の合計は、全体の69.4%であった。

理由は、「自分の意見をたくさんの外国人の人に見てもらえるから」、「世界の人と共有できて楽しかった」、「さまざまな国々の文化や伝統に触れることができたし、自分たちの文化や伝統を他国に広げることができたため」、「海外の人とつながれた気がしたから」、「世界に自分たちの文章を意見として見てもらえるから」、「他の人の投稿も見ることができたから」、「正しい英文を作成するという意識ができたから」というポジティブなものが多かった。一方、「投稿しても自分の英語力が向上したように思えなかった」「難しかった」というネガティブな理由もあった。

4-4 研究成果

今回の授業に関して、“The Effectiveness of Three-Way Corrective Feedback in EFL Writing in a Japanese Junior College Setting”（邦題「日本の短期大学授業における英文ライティングで三種類の訂正フィードバックを提供することによる効果」）という論文を実践女子大学短期大学部紀要第39号に発表した。また2018年1月に、同内容で、Hawaii International Conference on Educationにて、研究発表を行った。

2018年度の授業では、アイアーンプロジェクトを3つ導入して活動を行なっている。今後も引き続きアイアーンプロジェクトを活用した英語授業についての研究をすすめたいと思う。

参考文献

- Mita, K., Kubota, Y., Kurita, T., Maurer, Y., Baldwin, D., Vera, L., & Lavey, R. (2018). The Effectiveness of Three-Way Corrective Feedback in EFL Writing in a Japanese Junior College Setting. *The Bulletin of Jissen Women's Junior College*, 39, 23-49.

12. アイアーン沖尚の 15 年間

～部活動による iEARN 活動～

名前 上野浩司 アイアーン沖尚

iEARN の交流は、クラスとクラスが基本だが、日本では教育課程の問題も有り、中学以上で継続的に進めるのには、さまざまな困難がある。そこで、部活動を通して、iEARN に参加してきた。私立で移動もないため、顧問も変わらず 15 年間続けることができた。

先輩後輩のつながりもあり、中高一貫校で最大 6 年間継続することができるために、さまざまな効果をもたらしてきたことを報告する。

創設 15 年の部活 沖縄 被災地支援 30 カ国訪問

1 活動の始まり

アイアーン沖尚は、2002 年に誕生した。たまたま Iran とのテレビ会議をしませんか、という案内があり、希望者を集めて、Iran の人たち、及び Iran に住んでいる日本人とテレビ会議を行ったところ、もっとやりたいという強い声が多く出て、部活動として始めることになった。

2 毎年の世界大会を節目に

2-1 世界大会参加を目的にしたころ

iEARN の最大のイベントは毎年どこかの国で開かれる世界大会である。そこには 40～80 カ国から数百人の教師や生徒が訪れる。一週間に数十カ国の友人をつくるチャンスである。当初はこの世界大会に参加させるだけで十分であると思っていた。



スフィンクスとピラミッドをバックに

毎回数十カ国の人々と会える。英語でプレゼン

をする機会を持つ。プレゼンのために数ヶ月の準備期間を持つ。生徒には人生で最も希有な体験をさせられる。だから彼らも頑張る、と信じていた。毎年、世界大会で発表する内容を作るために実践活動を行った。

2-2 深い目的意識を持つように

しかし、生徒たちの参加意識はさまざまであった。エジプト大会の時には 17 名の生徒が参加したが、目的はピラミッドであった。それでも、多くの生徒は世界大会の参加を通して、意識が変わり、後に生き方が変わったと述べている。

2010 年頃から、世界大会だけでなく、アンネフランクを巡る旅、Silicon Valley ツアー、東北被災地支援ツアーなど、さまざまな研修旅行にも行くようになった。

3 iEARN に沿った活動、独自の活動

3-1 被災地支援活動

iEARN を通じて知り合った Iran のマーヤムさんの友人がイラン女性初のノーベル賞を受賞した。友だちの友だちがノーベル賞受賞。部員たちは喜んだ。同じ年の暮、イラン南部地震が起こり、マーヤムさんの別の友人が亡くなった。友人の友人が受賞して喜んだ私たちは、被災した人のことを考えなきゃ、と校内で募金活動を始めた。これがアイアーン沖尚の最初のボ



たくさんの Teddy Bear たちと

ランティア活動である。

そして、Indonesia で地震が続いたときもやはり iEARN で知り合った友人たちの国を支援しようと、募金活動が続いた。Philippines へのパソコン支援など、ハイチ、ニュージーランド、さまざまな支援活動を続けたが、2011年3月以来、東日本大震災の被災地支援を中心に続けている。この5月にも被災支援団体2つにあわせて、約20万円分の支援を行った。

直接の iEARN プロジェクトではないが、iEARN がなければ行われなかった支援活動である。

3-2 5年後に役立つ力

部活動の合い言葉は、「5年後10年後に役立つ力」である。シリコンバレー研修ツアーを定期的に行うが、ITの研修ではなく、興味の有るIT企業で働く人たちの生き方を学ぶ。そのために、卒業生も同行し、大学で学んできた、社会人へのインタビュー手法を指導し、実践する。

中学生も参加するが、海外で道を聞いてこいと言われる。エクスキューズミーも言えない子が、何度もトライして、道が聞けるようになる。部活では、できないことが普通にできるようになるまで努力を続けさせられる。

たとえ、英語が分からなくても、コミュニケーションが取れるようになる。社会人、大学生になって、壁にぶつかった時に、「いや、なんとかするよ」と言える力を身につける部活を目指している。

4 15年の活動の結果

子どもたちの頑張りで、15年間にさまざまな評価をいただいた、ブリティッシュカウンセルが主催した気候チャンピオンは3年間メンバーに選ばれ、イギリスやCOP16に派遣された。JICA エッセイコンテストでは最優秀賞に選ばれ、まちんと沖縄編が、「長崎から伝える平和の紙芝居コンテスト」で審査員特別賞をいただいた。生徒と一緒に回った国は30カ国以上。南北アメリカから、アジア、ヨーロッパ、アフリカ大陸に至る。卒業生たちは世界中に友人をつくり、10年以上も連絡を取り続けている生徒もいる。



Facebookの前で

今年の夏、アメリカ、バージニア州で行われる iEARN30 周年記念大会では、この15年間通い続けた私たちに「Excellence in Global Collaboration」という特別賞を下さることになった。ほぼ毎年、生徒と一緒に参加してきた学校は私たちだけである。学校の理事長、副理事長の理解を頂き、副理事長は台湾体感に参加して下さった。自費の参加でありながら、続けられたのは保護者のご理解のおかげである。

今の私の悩みは、後継者がいないことである。

上野浩司 (沖縄尚学高等学校)
メール (iEARN) wide@oki-wide.com
web
<http://www.oki-wide.com/iearn/okisho/>

13. 台湾、日南國中との交流と生徒の変容

～台湾国際教育国際会議～

名前 上野 浩司 (アイアーン沖尚)

台湾において2016年4月(第1回)と2017年11月(第2回)の国際教育会議が開かれた。その会議に参加し、台中の日南國中との交流を報告する。また、この報告を通して、台湾の国際教育についての考え方、実践について見聞きしたこともあわせて報告する。

台湾の国際教育 日本との交流 JEARN の歴史

1 はじめに

iEARN Taiwan から2016年4月に国際教育会議を行うから参加してほしいと、その半年ほど前に依頼が来た。

最初は、日本から一人出してほしいと言われ、JEARN 会員に希望者を募った。しかし、台湾から改めてカントリー・コーディネータに参加して日本の状況を伝えてほしいと言われ、手を挙げていただいた会員にはお断りをして、私が参加することになった。

第1回会議では、iEARN メンバーとして、JEARN の創設からの歴史と現状を話した。その時に、私のホストとなった台中市の日南國中の先生、生徒とたいへん親しくなり、第2回は日南國中と沖縄尚学「iEARN 沖尚」との交流成果を発表することになった。



Ed Gragert さんと学校訪問

2 第1回会議(2016年4月)

2-1 ホストスクール

海外からの参加者を、台湾の各学校がホストとなり、学校訪問や市内観光を行う。参加者は、台中市(会議も台中で行われた)と高雄市に分かれて滞在し、私はアメリカの Ed Gragert さんとともに日南國中にお世話になった。学校訪問では生徒たちと交流し、シティツアーは日南國中で最も英語のできる生徒(Lucy、台湾では、みな英語名を持つ)が私のツアーガイドを務めた。Lucy は初めて、外国人と話す機会を得たとのことで、半日私から片時も離れずに通訳を勤め上げた。(第2回にこの体験について説明する)

2-2 会議での発表

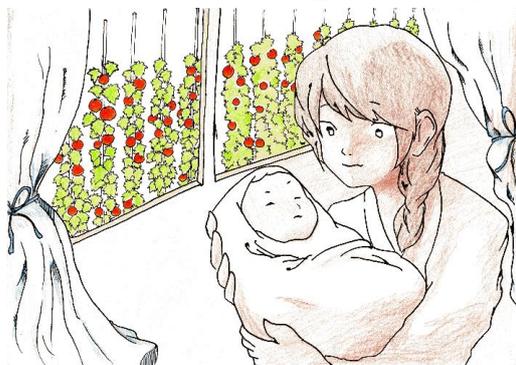
会議では、全体会で基調講演が行われ、分科会ではそれぞれの発表がおこなれる。



テレクラスで使われたルマフォン

私は、iEARN の分科会で、JEARN 創設者である、高木洋子氏がテレクラスから始めた国際交流支援活動を紹介するとともに、その減点となった満州の体験から話した。高木氏は満州生ま

れで終戦を満州で迎え、帰国まで大変な苦勞をされた。以前からその話を聞いていたアイアン沖尚の生徒たちが「Machinto Yoko's Story」として作った紙芝居を元に、彼女が平和を願い、世界の子どもたちを繋げようとテレクラスから iEARN の活動に参加した経緯を話した。



Machinto Yoko's Story から

3 台湾の国際交流

3-1 日本と似た状況

台湾の高校生は忙しい。日本以上に、進学熱が強く、皆塾に通っている。先日、台湾の先生が沖縄に来たときに、ショッピングモールに高校生がたくさんいることに驚いて、どうしてこの時間に高校生がいるんだ、塾には行かないのかと聞いた。台湾では、高校生はみな塾に通っている。



第2回会議、先日なくなったアメリカの Tonya さんも

私の発表の中で、iEARN の活動を続けながら、東大に入った生徒を紹介したところ、高校の先生方から、受験勉強と体験的学習や国際交流活動をどのように両立させるのかという質問をいただいた。大学に入ってから、体験的学

習に参加した方が良いのではないか、という意見も多いらしい。日本でも同様の意見が多かったが、入試制度の改革によって、少しずつ変わってきたと感じている。

3-2 日南国中の教育方針

日南国中の舒富男校長は、おそらく 40 代の若い校長である。彼の教育方針は明確だった。台中と言う街は、人口のほとんどがこの街で育ち、一生をこの街で過ごす。海外の人々とほとんど交流しないまま、習った英語を一生使わないまま過ごすであろう。その状況を変えていかなければならない。

子どもたちをどんどん海外に送り出すべきである。そのために、海外の学校との交流を進めていかなければならない。

校内に、空港もどきの空間を作り、ここが世界への出発点であることを示した。



南国中の中の「空港」

4 第2回会議 (2017年11月)

4-1 会議まで

第2回会議を秋に行うので、一緒に発表しないか、と日南國中から連絡が来たのが 17 年の 4 月だった。活動実践報告を行うので、Teddy Bear Project を中心にして、半年間交流を行った。

私の拙い英語では、誤解も生まれる。しかし、台湾の担当の若い Wei-Lin Chen 先生は、信じ合えばミスコミュニケーションは何でもない。英語はお互いが心を通わせるためのツールなんだから、と答えてくれた。娘のような若い先生に励まされて無事に 11 月を迎えた。

4-2 Lucy との再会

11月に台中を訪問したとき、もう日南国中を卒業しているLucyと再開した。先生方は、このLucyを今回の発表の目玉と考えていた。

彼女は、第1回会議のときに、私と話した体験から、英語がコミュニケーションのためにどれだけ重要かを実感したという。それ以来、いっそう英語学習に励み、奨学金を取って高校に進んだ。そして、今回、特別な許可を得て、公欠として、私たちの会議に参加し、自分の体験を発表した。

4-3 会議の形式

第2回会議は、分科会形式をやめ、全体会のみで互いの体験を共有することになった。前回よりも互いの体験が共有できて良かった。

4-4 私の発表

今回の発表は、日南国中との交流をメインにするつもりだったが、Lucyとの再会で、内容を変更した。以下のような話である。

実は、第1回会議の数日前に交通事故に遭い、私はネックサポートをつけて、杖をつきながら台湾に向かった。



2016年4月交通事故の直後

もし、私があの時、台湾行きをあきらめたら、この第2回会場に私はいなかった。そして、Lucyもここにいなかった。私との出会いがLucyを変えたとしたら、あの人に無理をして台湾に来て本当に良かったと思う。

私たち教師は、生徒にチャンスを与え、躊躇する生徒の背中を押すことだと思う。日南国中

の先生方が彼女の背中を押して、彼女の人生が大きく変わったのだと思う。

本人がその場にいたこともあり、大きな拍手をいただいた。



沖縄から合格祈願のお礼を

5 台湾は日本と交流したい

台湾政府は、この国が生き残るためには国際化しかないと考えているとのこと。教育の国際化が急務であると考えており、そのためにこのような国際会議を支援している。

そして、交流相手として周辺の国々を考えているが、特に日本との交流をメインに考えているようである。距離も近く、互いに友好的である。台湾が親日国であるのは有名で、実際に台湾に訪問した人たちは、みな台湾人の優しさの虜になってしまう。

多くの学校が台湾と交流してもらいたい。台湾との橋渡しは、いつでも喜んでやらせていただく。

上野浩司（沖縄尚学高等学校）

メール wide@oki-wide.com

FB

<https://www.facebook.com/iearnOkisho/>
iEARN カントリー・コーディネータ

1 4. 台湾における英語教育の現状と iEARN Japan の課題

福井 良子 JEARN

2018年5月2日から5月5日の間 iEARN 台湾の協力で台湾高雄市内の中学校・高校の英語授業を参観する機会を得た。それらの参観を通して2つの学校の生徒たちの高い英語表現力へ興味を持ち、その育成の法の一つとして活用されている海外との交流学习を紹介する。

キーワード：台湾高雄市の中学・高校、実践的英語力育成、国際協働学習、Teddy Bear Project

1 はじめに

台湾高雄市の中学・高等における英語の授業参観を通して実践的英語力に驚き、そのための授業の工夫、iEARN 国際協働学習の活用の様子を報告する。

2 目的

高雄市立文府國民中學 (Kaohshing Municipal Wun Fu Junior High School) と國立鳳信高級中學 (National Feng-Hsin Senior High School) における英語授業におけるの海外との交流学习の活用を紹介する。

3 活動内容

台湾高雄市において、高雄市立文府國民中學 (中学校) (Kaohshing Municipal Wun Fu Junior High School) 國立鳳信高級中學 (高等学校) (National Feng-Hsin Senior High School) の授業を計4回参観した。中学校における文法・リーディング・ヒアリングの授業はCDやカードの使用、グループに分かれての課題への話し合いなどそれぞれに一定工夫は見られたが、どれも教員を中心として生徒へ働きかけており、日本のそれとそれほど大差は感じられなかった。しかし、最もその違いに驚いたのが英語科の教員の英会話力の高さである。授業は彼ら流暢な英語を使って行われており、その英語をほとんどの生徒たちはさほどの苦勞なく聞き取っていたように見えた。教員からの英語の指示にとまどいなく従っており、投げかけられた質問に

も彼らは英語で答えていたことでもそれがわかった。

國立鳳信高級中學 (National Feng-Hsin Senior High School) では英語クラブの生徒たちの国際交流成果の発表を聞いたが前もっての台本を読み上げるのではなく、ネイティブの英語のレベルで自分たちの考えを表現していた。過去8年間高校生対象の国際会議を行っており日本の高校生の英語による発表を聞いているが、帰国子女でもない彼らの英語による表現力の高さは日本の高校生にはあまり見ることができないレベルのものであった。

このクラブは iEARN 台湾の前カンントリーコーディネーターのドリスが22年前に作ったクラブであり海外との交流体験を豊富にしてその体験を発表する機会を多く与えてきたとドリスが話していた。学校の玄関近くに多く張り出されている海外の学校を紹介するパネルから長年積極的に海外との交流を続けているのが見て取れた。國立鳳信高級中學はいわゆる大学受験を目的とした高校ではなくアート等の受験目的ではない授業に重きをおくいわゆる専門学校の要素が強い学校であるが生徒たちからは英語への強い意欲を彼らの発表から感じることができた。

そこからわかったことは、生徒たちは海外との交流学习としての英語経験が高く、また英語で発表など英語に接する機会が多くそれが彼らの英語の学習に対する意欲を高める要因となっていると推察された。

直接英語に接する機会をできるだけ多く生徒たちに提供することで、生徒たちは教科書を中心とした教員主体の授業だけでなく海外との相互学習を体験してそれを発表することでより実践的な英語力を身に付けていると思われた。

台湾は国家予算に占める教育費が高い国であり、経済の自由化と国際化政策の柱として英語はあらゆる分野で重要視されている。そのため台湾の教員は日本の教員と比べて優遇されており、クラブ活動の世話の必要がないなど授業以外の学校での拘束時間も短い。

しかし台湾でも英語は外国語として学習しており、日常生活で英語に接する機会があまりないと言われている。その点は日本と大差はない。海外との交流学习を進めるにはそれなりの工夫が必要である。

高雄市立文府國民中學（Kaohsiung Municipal Wun Fu Junior High School）では海外との交流学习の方法として iEARN Teddy Bear Project と Holiday Card Exchange Project を活用していた。

<http://affairs.kh.edu.tw/1516>

上記の学校のホームページには国際協働学習の様子や発表を細かく表示している。特記すべきは Teddy Bear Project のための冊子を各学年作成していることである。1冊計12か国で世界を一周する試みが行われていた。各ページの右側には国の名前と国旗があり左側にはその時すべき課題（発音の練習、家族の紹介、何を学んだかなど）がそれぞれ含まれている。これをもとに生徒たちは海外との協働学習体験発表を行っていた。各冊子のページには Parents Feedback をつけていて家庭の理解と協力を求めている点も生徒たちのモチベーションを上げる効果を上げている。

4 課題

英語教育の究極の目的は、英語を積極的に使用し、情報収集や自己発信出来る人物の育成である。そのためにはどのくらい実際の英語に接しているかどうかが大切である。

iEARN の国際協働学習を活用すると実際の英語に接するだけでなく、一方的な知識の伝達ではなく、相互理解のツールとして英語学習を広げることができる。iEARN 国際協働学習の役割は学校においてもっと重要視されるべきである。

しかし、課題として Teddy Bear Project を世界に発信している iEARN Japan である JEARN においては台湾ほど Teddy Bear Project が国内の学校に広めているとはいえない。実際の英語に接する機会を国内の生徒たちに与えるためにもこのプロジェクトをもっと国内の教員が使いやすい方法を考えるべきである。そのためには、その効果の成果の可視化、具体的な学習ツールの作成、広報活動の活発化が急務である。

写真：高雄市立文府國民中學で使用されている Teddy Bear Project を活用した English Learning Passport:



15. 台湾とのテディベアプロジェクト

～「相手意識」と「自文化理解」～

角納 裕信（金沢市立大野町小学校） 清水和久（金沢星稜大学）

金沢市は、英語特区となって以来、独自のカリキュラムと副読本を作成して英語活動を行ってきた。文部科学省から、正式に入ってくる外国語に対してどのように捉えて実践していくと、「学びに向かう力、人間性等」が養われていくのか、について実践例を出しながら考察していく。

また、高学年においては、中学校との接続を意識していかなければならない。どこを押さえつつ、児童に学ばせていかなければならないか、ということについても考察していく。

「意欲的を持って」≡「学びに向かう力」 相手意識 異文化理解 LINE リアルタイム

1. はじめに

教員になったときから、「国際理解教育」を様々な形で行ってきた。もとより、「国際理解教育」と「社会科」を実践したく教員になった。

今回、LINE を使って、リアルタイムに、異文化理解を中心に実践したく“Teddy Bear Project”に参加した。

2 目的と方法

2-1 目的

英語教育と国際理解交流学习について、「言語」「異文化理解」「交流密度」「交流時間」という側面から、実際に行ったことと共に考察していこうと考えた。

2-2 方法

先に書いたように、①交流言語②異文化理解③交流密度と交流時間について実際に行った実践と考察をしていく。

1) 交流言語

今回のプロジェクトでこだわったのは、LINE の活用である。テディベアは、朝の会の話の中にトピック的に入れられるように、時間的な拘束が少ない。さらに身近に交流することができる。子ども同士の交流であっても、まずは、先生同士が仲良くならなければならない。LINE でお互いの先生が、好きなもの等について、自己紹介し合った。英語で自己紹介をするのも良いのだが、最近の LINE は便利で、中国語→日本語、日本語→中国語で打てば、即座に変換してくれるのである。あくまでロボット変換であるから、時に変な翻訳になるのだが、そこは、ニュアンスが伝われば良い。例えば、「我是淑媛」（私の名前は、淑媛です）→「私はしとや

かな美女です」と変換されてしまった。

そんなときは、簡単な文で区切ったり、簡単な英語で書いたりすることで、より確実に伝わるようになった。自分の国の言葉と、英語との違いも、よく分かり、異文化理解に繋がったのではないかと考えられる。児童同士の自己紹介などは、話している様子を動画で撮って、そのまますぐに送ることができる。台湾の教室も金沢の教室も ICT 化が進んでいるので、送られてきた動画をそのままディスプレイに接続して子ども達に見せることができた。子ども達に運動会行事や学校紹介の動画を、リアルに同年代の児童が話す英語に触れることができた。

2) 異文化理解

「交流相手からの情報による、異文化に触れ、多様な文化を理解する力」（異文化理解）
・「自国の文化に触れ、交流相手国の文化と比較することで、自文化を捉え直す力」（自文化理解）が、子ども達につけたい力である。

交流をしながら、段階を追って、異文化理解
・自文化再認識を行っていく。



写真1；お茶をたてているブラック。

自主学习では、台湾の国旗や観光できるところなどを調べてきていた。

総合的な学習で、①大野醤油について ②伝統芸能について ③海洋教室について と大きく分けて3点について学習している。自文化理解ということであれば、総合的な学習で勉強することが、そのまま自文化理解の学習である。①日本食（和食）は、台湾でも人気であった。（蕎麦や寿司）和食に醤油は欠かせない。本校では、醤油工場見学から醤油作りまでを、講師をお呼びして学習している。②「早打ち太鼓」「豊年太鼓」「獅子舞」「悪魔祓い」を先輩から後輩へと教師が教えなくとも、子どもから子どもへと受け継がれている。③金石の港に生息する生物について、自分たちで「しかけ」を作って捕まえ、調査活動をしている。以上、①②③で自国文化について学習する基盤が、大野町には、あった。

無かったのは、発信先である。せっかく学んだことを発信する先が、保護者や地域にとどまっていたことである。学んだ地域自慢を発信する先がなかったが、これからは交流相手の台湾が発信先である。このことは「相手意識」を持つ上で大変有用であった。「醤油の町、我が街大野町」とテーマを決め、随時、発信先としての台湾高雄市新甲國国民小学校との交流を積極的に進めることとした。

発信先を求めたのは、比較することで、他の場所に比べて、自分たちの地域の文化がいかにか大切に受け継がれているか、いかに素晴らしいものであるか、その文化を学習できることの良さを実感として受け取ってもらいたいと考えたからである。

3 活動内容

実際には、学校での様子やホームステイ先での様子を頻りにLINEで送り合って交流することができた。

映像や写真をタイムリーに活動の様子を送り合うことによって、そして、その様子を朝の会の後やちょっとした余った時間でディスプレイに投影して子ども達に見せた。驚きと共に児童の中に、いろいろな疑問が湧いてきた。例

えば、台湾の同年代の子ども達は、どんなことが趣味で、放課後はどんなことをしているのか？どんな科目があって何が好きなのか？どんな遊びが、はやっているか？などである。

疑問を投げかけると、次の日には、LINEを通じて、自己紹介、学校紹介の動画が送られてきた。そこには、学校生活については、運動会があったり、合宿があったり、ほとんど4時ぐらいまで学校で勉強していたりすることは私たちと一緒にであった。こちらからは、太鼓動画や醤油づくり写真を送った。

LINEは写真・動画・URLを手軽に送れ、そして翻訳までしてくれる機能がついている。LINEのおかげで、交流が手軽になり、効率的に時間を使え、且つ交流密度は、ぐっと上がったと考えられる。

4 成果と課題

交流しやすくするため、基本的な英文の文章構成の例を学び、活用することにより、「伝わった、もっと交流したい。」や「なかなか伝わらなかった、今度交流するときには、もっと練習しよう。」となり、実際の交流を通して、「もっと相手のことを知りたい。」という「相手意識」が、「意欲」を持つことにつながっていくと考えられる。もっとよく伝わるためには？今まで学習した（既習の）英語例文を少し変えて、伝えてみると伝わった、という、自分で考えて、成功した、という体験こそが次への学習への意欲に繋がっていくのであると考える。



写真2；そろばん塾のブラック。

16. 2ヶ国語で ‘Teddy Bear Project’

～オリンピック・パラリンピック教育の一環として～

滝沢麻由美（東洋学園大学）

本報告は、昨年度に東京都と他県の8つの協力校で、オリ・パラ教育の一環としておこなわれた研究授業（町田・滝沢, 2018）の中から、特に都教委の「世界ともだちプロジェクト」として、iEARNのプロジェクトをオーストラリアの小学校の日本語選択クラスとおこなった1校に焦点をあてたものである。活動案は内容言語統合型学習（CLIL）のフレームワークを用いたが、特にお互いの母語と学習言語の2ヶ国語を使った内容の多様さと、同年代の児童への相手意識の高まりがみられた。

国際協働学習 オリ・パラ教育 国際理解教育 2ヶ国語 CLIL

1 はじめに

2020年4月から、小学校においては新学習指導要領がスタートし、外国語（英語）が5, 6年生で教科化、また3, 4年生では外国語活動が必修化されることは、すでに周知の通りである。そして7月には、いよいよTokyo2020も開催される。これに向けて、東京都を中心にオリンピック・パラリンピック教育（以下、オリ・パラ教育）が実施されているが、本実践で特に筆者は、新学習指導要領の3つの柱のうちの「学びに向かう力、人間性など」（どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか）につながる外国語教育とオリ・パラ教育（オリ・パラの精神、スポーツ、文化、環境）は、人権や平和教育も含む国際理解教育で、iEARNの国際協働学習がめざし具現化しているものと大きく重なると捉えている。それは何よりも、実際に他の国々の相手とことばを使い、考えや気持ち、経験を共有するコミュニケーションを通して、地球市民としての連帯意識と行動力を育むことにつながると考えられるからである。このような認識のもと、今回の実践をおこなった。

2 目的と方法

2-1 目的

1) 新学習指導要領の3つの柱と、CLILの4Csの要素を組み合わせた目標観点を入れ、特に

今回の特徴である2ヶ国語でのやり取りを含んだ多様な活動案を作成すること。

2) この活動を通して、特に日本の児童が、同年代の外国の児童への相手意識を高めること。

2-2 方法

対象: 大田区立馬込小学校4～6年生の混合グループ20名と、Eaton Primary Schoolの5, 6年生の日本語選択クラス16名

交流期間: 2017年5月から2018年2月まで。

1) 今回の活動案作成と実施: ほぼ毎月共通のトピックについてのやり取りをiEARNのCollaboration CentreのForumの他に、自分達だけで共有するSNSのスペース、または郵送で送り合い、それらをそれぞれの学校で、authentic materials, outcomes, end productsなどにしながら、授業や活動を展開した。

2) 振り返り: ①日本の授業者（筆者）と、②児童が、上記のCLILの4Csの観点による質問項目（4件法）に自由記述を加えた振り返りを記入した。

3 活動内容

3-1 今回の活動案作成と実施

5月～自己紹介&Self-introduction（日本語と英語の両方で名前を書いた画用紙を持ち、2ヶ国語でおこなう）〈ビデオ〉

6月～校庭遊び紹介（2ヶ国語）〈ビデオ〉

7月～Tokyo2020のマスコットをデザインし、

- 投票してもらう。〈画像とコメント〉
- 8月～夏休みの思い出の collage 作り&スピーチと絵日記(英語) 〈ビデオと作品送付〉
- 9月～健康的な食生活について～野菜と果物(2ヶ国語) 〈ワークシート画像&スピーチビデオと作品送付〉
- 10月～絵本「もったいないおばあさん/Mottainai Granma」(2ヶ国語) 〈ワークシート画像とスピーチビデオ〉
- 11月～ホリデーカード作成(2ヶ国語) 〈作品送付〉
- *12月から2月～全体の振り返り
- その他(おもに母国語で、教師が適宜翻訳) : 運動会紹介/朝食紹介とその感想 〈ビデオ&画像〉、学校案内&先生紹介 〈画像〉、交換しているぬいぐるみの Homestay Diary 〈ワークシート画像と作品送付〉、英語/日本語を学んでいる感想、お礼メッセージ等



写真1 Tokyo2020 のエンブレムとオーギー

- 3-2 振り返り(児童用)
- Q1.今日の活動は楽しかった。(以下、4件法)〈知識・技能の観点から〉
- Q.2 Content:内容
(活動の内容に関する理解や興味の度合い)
- Q.3 Communication:言語
(活動の目標言語を聞いたり話したり書いたりできた達成度)
- 〈思考力・判断力・表現力等の観点から〉
- Q.4 Cognition:思考
(活動で考えたり創造したりした度合い)
- 〈学びに向かう力・人間性などの観点から〉
- Q.5 Community/Culture:協学
(ペアやグループで協力したり、異文化に関する興味や関心、気づき等の度合い)
- Q.6 その他、気づいたり感じたことを書いて下さい。(自由記述)

4 成果と課題

1) 成果

Q.1では、毎回全員が4か3を選んでおり、またQ.2から、毎回の活動の中でそれぞれが自分の好きなことを楽しんでいた様子があった。授業者としては、オリ・パラ教育の要素を取り入れることによって、より多様で具体的な国際理解の視点を含んだ教科横断型の授業案が作成できたのでは、と考えている。Q.3では、様々な語彙使用と、お互いの母語と相手の学習言語におけることばへの気づき(発音やイントネーション等)が、Q.4では、共通トピックによる類似点や相違点に関する思考、そして特にQ.5で、国際協働学習によって実際にやり取りする海外の同年代の児童への相手意識の高まりが見られた。以下、児童の感想の抜粋である。

- ・今まで自分が知らなかったことをいろいろ教えてくれて、知ることができた。
- ・イートン校の人たちと英語で話してみたい。
- ・とても楽しかったので、またいろいろな海外の人たちと交流したいです。

2) 課題

こちらは月1回の活動だったため、各活動の流れややり取りが少し慌ただしくなっていました。また、より相手校児童に親しみを感じられるよう、1対1でのやり取りやスカイプ設定等が今後の課題である。

謝辞：本研究は、2017年度「一般財団法人 日本児童教育振興財団」の「学校教育の実践教育への助成」を受けており、あらためて感謝する。

参考文献

- 町田淳子・滝沢麻由美(2018)「国際理解教育としてのオリンピック・パラリンピックをテーマにした小学校英語教育教材開発」研究報告書 東京都教育委員会(2016)「東京都オリンピック・パラリンピック教育」
<https://www.o.p.edu.metro.tokyo.jp/>
大田区立馬込小学校(2018)「スクールサポートまごめ 平成29年度土曜英語教室」HP

Kanazawa Youth Project

1 7. テディベアで繋がるモロッコの高校生との日本の大学生

高尾 好（金沢星稷大学学生）清水和久（金沢星稷大学）

金沢星稷大学の3年清水ゼミナールの活動として、モロッコの高校生ら十数名と「テディベアプロジェクト」の実践を行った。国際理解の大切さを感じてもらおうと近隣の小学校へ出向いて「世界がもし100人の村だったら」という題材を扱ったワークショップを開いてきたが、実際に自身らが海外の学生と交流することは初めてであった。活動していく中で自らのICT活用力や英語力だけでなく、小学校での英語教育の必要性と国際理解を深めることの重要性を再認識できた。

ICT活用力 大学生 英語力 国際理解 異文化交流体験

1 はじめに

石川県金沢市内の小学校では総合的な学習の時間として、iEARNの活動の一環である「テディベアプロジェクト」（以下、プロジェクト）に取り組んでいるところが数校ある。昨年度の始めにプロジェクトに参加したいという金沢市の小学校の先生方にお集まりいただき、月に一度「国際協働研究会」を開いて進捗状況や今後の課題、要望などを話し合う場が設けられた。小学校教員を志望する本ゼミナールの3年生もサポートとしてプロジェクトに参加した。また、サポートだけでなく、自身らも当事者となってプロジェクトに参加してモロッコの学生たちと交流する機会を得た。

2 目的と方法

2-1 目的

学生主体でプロジェクトに参加するにあたり、次の3つに目的意識を向けた。

- 1) 学校現場の先生と進行を共有すること。
- 2) プロジェクトへの参加経験が、自身らが小学校教員となったときの糧になるよう、ベアの準備から発送の仕方、相手との交流、と一連の流れ全てを体験すること。
- 3) コミュニケーションや相手国についての情報収集等のためのICT活用力を向上させること。

2-2 方法

- 1) 国際協働学習研究会の開催
- 2) プロジェクトの流れを学生自身で経験する
- 3) ICTの活用（交流ツール）

3 活動内容

3-1 国際協働学習研究会の開催

表1 国際協働学習研究会の時期と内容

回	時期と内容
1	6月：国際協働学習研究会の趣旨説明 プロジェクトの説明
2	7月：JEARNへのオンライン申し込み 交流校のマッチング
3	8月：フォーラムの書き込み練習 自校の紹介書き込み
4	9月：交流相手の正式決定 留意点の確認
5	10月：スタート時からの経過報告、学校紹介などの準備
6	11月：国際交流の経過報告 100人村ワークショップ打合せ
7	12月：国際交流の課題について 台湾訪問時の紹介ビデオ内容
8	1月：まとめの会 台湾の小学校の訪問時の報告

月に1回のペースで行い、JERANの登録を学生が先に行い、現場の先生方に登録の方法を教えた。また9月にスタートが切れるように6月から活動を始め、10月には学校に出かけて行って国際理解の像乳授業として「世界がもし100人の村だったら」のワークショップも行った

1月には、金沢の小学校の交流先である台湾にも出かけて行き現地の報告ビデオを作成。

3-2 自分たちのテディベアの実践

	計画した内容
6月	地域コンテンツの収集
7月	地域コンテンツの収集
8月	学生による交流先の教師との交流
9月	ぬいぐるみの性格付け
10月	交流校からのぬいぐるみの受け取り
11月	金沢紹介コンテンツの作成 Skype 会議実施
12月	ぬいぐるみ滞在コンテンツの作成
1月	かっちのぬいぐるみの送りだし
5月	サミーの記録と送り出し

年齢が近いモロッコの高校生たちと組むことが決まり。その後は本学でのゼミナールの時間を用いた交流活動を軸に、相手校にベアとともに送るお土産を考えた。日本のベアは学生の1人が持っていたプーさんに決まり「かっち」と名付け、相手からは「サミー」がやってきた。

双方の時間が合うときにスカイプでのテレビ会議を行い、相手は、日本のアニメで日本語を覚えているとのことであった。1月17日にモロッコへ自分たちのベアを送り出し、5月8日に双方にベアが無事もどった。



写真1 日本のかっち（左）と送られてきたサミー（右）



写真2 テレビ会議で盛り上がる様子



写真3 サミーを家に招いて撮影する大学生たち 3-3ICt の活用

iEARN のテディベアの掲示板もあるのであるが、やり取りはメッセージャーが中心となった。とても手軽に発信できるからである。



写真4 メッセージャーでのやり取り内容

4 成果と課題

モロッコの学生たちと文章のやり取りやテレビ会議、またプレゼント交換などを通してモロッコの文化や言語に触れることができ、自分達の興味関心だけではきっと関わることのなかった国の学生たちと出会うことができた。これっきりで終わらせるのではなく、モロッコの学生たちとの縁を、これからも大切に、自身が教育現場に入った時に今回の体験をうまく活用できないか検討していきたいと考えている。

Kansai Youth Project

18. Folk and Culture Project 活動報告

～第1回 Folk and Culture Project 神戸市立小部中学校での活動を中心に～

野瀬 彩弥 田中 彩奈 福井 良子 Rasagnya Puppala
Kansai Youth Project ファシリテーター

昨年度新たに発足した iEARN プロジェクト、“Folk and Culture Project”は、地域の伝承芸能と世界の伝承芸能について学び、それらを次の世代に受け継いでいくためにどうしていくべきかを生徒たちが「主体的に考え、話し合い、発表をする」プロジェクトである。学校と地域、そして海外を巻き込んだ新しい学びを得ることができるこのプロジェクトについて、神戸市立小部中学校での活動の報告を中心に、本稿にてその概要と活動の報告を実施する。

キーワード：文化継承 協働学習 公立学校 社会との繋がり プレゼンテーション

1 はじめに

本文において、2017 年度に SDG s の目標の「質の高い教育」のひとつとして iEARN の新しいプロジェクトに認められた “Folk and Culture Project”の概要と活動実績について報告するものである。

2 目的と方法

2-1 目的

子どもたちが、自分の地域にある伝統文化について、また海外の伝統文化について学ぶことで、それらの伝統を受け継いでいくために何をすべきかを考え、まとめ、発表する機会を提供すること。

2-2 方法

Folk and Culture Project は、「知る」「考える」「話し合う」「まとめる」「発表する」をベースに構成される。自分の地域及び海外の伝承芸能について、講義やプレゼンテーションを元に「知る」、その中で問題提起される、受け継いでいくための課題を元に自分なりに「考える」。その上で、複数人でまとめて「話し合う」、自分たちの考えを「まとめる」。そして、皆の前で「発表する」。

このステップをふむことで、生徒たちに、自ら考え、複数人で話し合うことで学びを深めた上で、発表をする経験をシンプルに提供できるのである。更に、ここでの発表を実際の文化の

継承者にフィードバックすることで、学校の中での生徒の学び・アイデアが、学校の外でもいかされる機会を提供することが出来るのである。

3 活動内容

第1回 Folk and Culture Project として神戸市立小部中学校にて、中学2年生の総合の時間（計4時間）で日本と海外の地域の伝承芸能を比較し、2者の共通点や課題について考え、話し合い、発表するというグループワークを実施した。

1時間目は、体育館に集合し、インドに伝わる伝承芸能「ブラカタ」を、インド人スタッフから映像と日本語英語交じりのプレゼンテーションにて紹介し、その後日本の伝承芸能として神戸市北区に伝わる「農村歌舞伎 丹生歌舞伎」を、現在も神戸市北区で活動を続けている方々が写真と実演を交えながら紹介。

2時間目は、1時間目に見聞きした内容を各教室に持ち帰り、3～4人のグループに分かれて話し合いを実施。地域にまつわる伝承芸能の現状や課題、問題点をきっかけに、伝承芸能・文化の現状や問題点、地域の課題など、多様な視点で物事を考える為の時間とした。

3時間目は、1・2時間目の授業から1週間後、前回の内容を踏まえて調べたり考えを深めたりしたことをまとめて発表する準備を実施。特定の伝承芸能・文化に焦点をあて、継承する

ためにはどうすればいいかを考えるグループもあれば、現在継承されている文化を調査し、「丹生歌舞伎」との相違点をまとめたグループもあった。また、町おこしに着目し、伝承芸能や文化と地域には密接な関係や、両者が連携することの重要性を発表したグループもあった。

4時間目は、各グループが何に着目し、どういった話し合いをしたのか、準備した模造紙を中心に発表の時間とした。同じ1つのテーマをもとに考え話し合い作り上げた発表にもかかわらず、グループによって全く異なる発表が成された。



写真1 生徒達が発表の模造紙を作成する様子



写真2 生徒達が発表をする様子

4 成果と課題

今回、4時間という時間の中で「知る」「考える」「話し合う」「まとめる」「発表する」という学びを提供した。公立の学校教育の中で、異文化に触れ、自分の地域の文化を見つめ直すだけでなく、考え、発表する機会を提供できたことは、大きな成果であると考えている。また、ここでの発表が、地域の伝承芸能を実際に受け継ぐ活動をしている人達にとっても、新たな発見としてフィードバックされ、「学校の中での学び・生徒が自ら考え発表した

こと」が、「学校の外へも影響を与えた」ということにも触れておきたい。

課題としては、今回の学びにこれを発展させ、この「発表」をもとに更に「話し合う」機会をつくることができれば、さらに深い学びへと深化させられるのではないかと考えている。

この活動を実践例として、各学校を中心に、神戸大のESD推進ネットひょうご神戸と協同して企業・NPOを巻き込み、広く深い学びを提供するために、iEARNのネットワークを活用していきたい。

お問い合わせ:
Kansai Youth Project 事務局
メール kansai.youth.jearn@gmail.com
電話 080-5318-0766

19. 日本・韓国・台湾における英語教育制度と実態の比較

～日本の英語教育政策の誤謬に関連して～

奈良 勝行 (白梅学園大学)

日本では今年度から小学校の外国語（英語）活動が3・4年生に、英語の教科化が5・6年生に前倒し実施された。この実施には英語の専科教員免許を持たないクラス担任が担当させられるなど様々な批判が多く出されている。そこで日本と同じEFL環境にある韓国を昨年11月、台湾を今年5月に訪問して授業を見学して英語科教員と意見交換を行った。その結果を報告し、英語教育制度と実態を比較検討してみたい。

小学校英語教育、専科免許、資格と採用、教員の研修、4技能の指導

1. はじめに

新学習指導要領により、日本では小学校の英語活動・教科が2020年から本格実施されるが、2018年度から前倒し実施された。韓国では1997年に小3から、2008年に英語が小1から必修化された。台湾では2001年に小5・6から、2005年に小3に必修化され今日は全国的に小1から実施されている。

この施策について最大の問題は、英語の専科の免許を持たないクラス担任にその指導を押し付けていることである。免許を持つ担任の数は全国的にわずか4%に過ぎない。いわば「無免許指導」である。英語教育を担当する学級担任は93.1%であり、政府が研修を課す「英語教育推進リーダーの教員はわずか1,000人である。クラス担任はALTや地域の英語指導補助員の助けを借りて「授業」を行い、夏休みなどにわずかな期間の研修を受ける。

韓国では、英語の授業を、英語専科教員か、基礎研修120時間の研修を受けた現職教員が担当している。台湾では、英語の授業をすべて専科教員が担当する。

2. 目的と方法

2-1 目的

- ① 同じ言語環境にある韓国と台湾の英語教育を視察して日本の英語教育の制度・実態を比較し、我が国の英語教育施策の基本的な誤謬を明らかにする。
- ② 韓国と台湾の教員と生徒の英語の運用能力の高さの原因をさぐる

2-2 方法

釜山市市立安樂中学校、高雄市立文府國民中學と國立鳳信高級中學を訪問し英語の授業を見学し、担当の英語科教員と懇談を行った。

3. 活動内容

3-1 安樂中学校では1年生がCaliforniaの中学の生徒たちとPCメールで交流する授業を見学（下の写真）。生徒たちは、送られてきたメールを読み、45分の授業時間内に返信を書く作業をやっていて、隣の生徒と教え合いながら楽しそうにやっていた。返信を書くと教師が英文をチェックして相手国に送信する。2週間に一度メールで学校や趣味等について交流する。この国際交流をやる中で、ライティングの力もつけさせる。



釜山の英語の教師グループ（10数人）は2週間に一度、夜ある高校に集まって授業のさまざまな問題や悩みを語り合う会を開く。教師はこの会からいろいろ学び励まされるそうだ。

残業については、生徒の自主学習の際の指導などで午後9時ころまで残ることがある（週1～2度）。その際は手当が支給される。また土曜日にクラブ顧問で出勤することがあるが、そのときも支給される。夏休みに課外活動や1～2週間の受験指導で出勤することもあるが、日本のように毎日出勤するというのはいりえない。

3-2 文府中學では2年のリーディングの授業を見学した。CDやカードを用いて授業が進められていた。教師は授業時間中ほぼすべて英語を話し、質問に生徒はすぐに答えた。5人グ

ループの協働学習を行い、教師から出された課題を討議してグループ代表が発表した。教員の話す英語の流暢さもさることながら、国際交流を旗印に開校して3年目の学校で入学してきた生徒の英語を話す力に驚いた。小1の時から英語を学習しているだけあって臆せず英語を話す態度に感心した。

授業では後方に数人の同僚教師が見学しており、その日の授業終了後に集まって意見を述べあい、改善に役立てるといふ。この「同僚性」にも感心した（日本では管理職が「監察」を行う。どちらが益するか論じるまでもない）。

高級中学は台湾に13くらいしかない国立の高校でいわばエリート校。国際交流を活発に展開する学校で、玄関の大きな壁に数か国からの学校訪問のパネルが掲げられていた。またアートの育成にも力を入れる。

5時限目の英語クラブ(Global Learning Union)の時間(下の写真)では、生徒(25人)が自分たちの外国のホームステイの体験や文通について原稿を全く見ずに、よどみない英語で話す姿に圧倒された。内容はともかく、おそらく日本の大学生でもできない speaking levelであった。



その後の7時限の授業では、環境をテーマにしたレッスンで、教師がすべて英語を話し、世界地図に生徒はグループで指示された事項を入れていくという作業を行っていた。単なる訳読の授業でなく、生徒に問題を投げかけて協働学習させるもので、生徒は積極的に授業に取り組んでいた。(下の写真)



この2つの学校で授業見学の後、教師と質疑応答・懇談を行った。早期英語教育、高い英語運用能力の背景、教育への政府の取組みなど。懇談では、日本と同じような「入試偏重の教育」、一般教員への強い管理があるものの、勤務時間では日本の文科省の調査結果が示すように、「過労死ライン」の「週60時間以上勤務」する教員が57.7%にも上るといふ異常な長時間労働は台湾に(韓国にも)なく、また土日勤務や長期休業中(夏休みなど)の勤務もほとんどなく、教員は日本より誇りをもって教職に従事していることが分かった。

台湾や韓国は日本よりも教育について政府が熱心である。経済のグローバル化政策を推進しており、英語があらゆる分野で重要視され、高い英語力をもつ者が優遇される。「グローバル人材育成」は誤りという指摘もあるが、英語重視はゆるがない。

4. 課題

世界3位の経済力(GDP、2016年約5兆米ドル)を誇る日本は、公的教育支出の対GDPは先進国の中では異常に低い。小学校英語教育の導入についていえば、担任の研修費の支出、英語の専科教員の増加、英語教育に必要な少人数クラスの実現などに必要な支出をしないなど積極性に欠ける。免許を持たないクラス担任に指導を任せるなど論外である。韓国や台湾から20年近くも遅れて小学校英語教育を導入して、しかも必要な予算支出をしなければ、教員や生徒の英語力は劣るばかりであろう。当面する小学校の英語教育の誤謬を直すために早急な政策の転換が要求される。

20. iEARN モロッコ国際会議報告

清水和久 (金沢星稜大学)

iEARN 国際会議は、毎年開催され、世界中から多くの教育者を集めている。iEARN の組織の成り立ちはアメリカとソ連の冷戦時代にお互いを知らないことからくる疑心暗鬼から戦争に発展することを防ぎたいという思いから始まっている。次世代を担う若者同士がもっと交流できるプログラムが必要であると考えられるようになった。iEARN では様々な国際プロジェクトがあり、世界の教育者が ICT を活用することでそれを成し遂げてきた。

この国際会議では、世界中の教育者が一堂に集まり、実施してきたプロジェクトを報告し、新たな参加者を募るとともに、お互いのネットワークを築く機会でもある。同時にユース会議も開催され次世代を担う、中高生が互いに知り合う機会にもなった。本報告では筆者が参加した全体会議及び分科会の中からいくつかを選んで報告する。

国際協働学習 国際会議 iEARN JEARN

1 はじめに

2017年7月17日から22日まで第23回 iEARN 国際会議及び第20回ユース会議がモロッコのマラケッシュにおいて開催された。この iEARN (International Education and Resource Network) の国際会議は日本では2003年に淡路島で開催されている。それ以来筆者は、今回も含め6回この国際会議に参加している。

2 目的と方法

2-1 目的

iEARN の歴史、及びモロッコ大会の概要についての報告。

2-2 方法

- 1) iEARN の歴史
- 2) モロッコ会議の概要
- 2) 全体会議の報告 (2本)
- 3) 開催された分科会についての報告

3 内容

3-1 iEARN の歴史

アメリカの Peter Copen 氏が、アメリカとソ連が冷戦下で、相互の国民が不信感を抱いている事実を嘆き、互いが分かり合えるために若者同士をつなごうと、Copen Family Foundation を設立、モスクワとニューヨーク州の12校ずつの学校をつないだ Telecommunication project をスタート (1988年) させた。このプ

ロジェクトには、ロシア科学アカデミー (USSR Academy of Science) とニューヨーク市教育省 (New York State Education Department) のサポートがあった。両者の学校間では、社会的政治的な問題について討論がなされたり、互いの国の著名な作家の本を読み合ったりなど異文化理解が進んだ。*1

1990年には参加国が9カ国に広がった。そして1994年に第1回の年次国際会議がアルゼンチンで開かれるまでになった。草の根レベルで教育者同士、児童生徒同士を結び付け、生の情報をやり取りして学習することで、お互いの異文化理解を急速に深めることができる機会となっている

表1 iEARN 大会開催国

第1回 1994年	: アルゼンチン
第2回 1995年	: オーストラリア
第3回 1996年	: ハンガリー
第4回 1997年	: スペイン
第5回 1998年	: アメリカ
第6回 1999年	: プエリトルコ
第7回 2000年	: 中国
第8回 2001年	: 南アフリカ共和国
第9回 2002年	: ロシア
第10回 2003年	: 日本
第11回 2004年	: スロバキア
第12回 2005年	: セネガル
第13回 2006年	: オランダ

第14回 2007年：エジプト
第15回 2008年：ウズベキスタン
第16回 2009年：モロッコ
第17回 2010年：カナダ
第18回 2011年：台湾
第19回 2012年 VCで開催
第20回 2013年：カタール
第21回 2014年：アルゼンチン
第22回 2015年：ブラジル
第23回 2017年：モロッコ

2012年は、開催地が決まらずネット上で開催されたという意味で VC（ヴァーチャル）となっている。上記の国際会議の内、筆者は、日本、エジプト、カナダ、台湾、カタール、ブラジル、今回のモロッコと7回参加している。

3-2 会議の概要

2017年の年次国際会議は、中高生が参加するユースサミットとともにモロッコのマラケシュで、7月17日から7月22日まで開催された。43カ国から、約210名の教育者と90名の若者が参加。5日間の開催期間で、全体会での発表が9本、分科会（ワークショップも含む）が65本、ユースサミットで14回のセッションが実施された。分科会のプレゼンターは、各国で様々なiEARNプロジェクトを行っている教育者で、ICTを活用しておこなってきたプロジェクトの紹介を対話型のワークショップをすることで紹介していた。本報告では、筆者が参加した会の中から、全体会議から2本、分科会から6本を選んでその内容を紹介する。



図1 第23回 iEARN 国際会議オープニングの様子

3-3 全体会議の事例

全体会議は、各日の午前に行われ、合計で9本の講演が行われた。本報告では、以下の2本の講演について述べる。

1日目の全体会議の講演の2本目で、Mohamed Sidibay氏の「The power of quality education in changing lives and the danger of a mind kept in captivity」（人生を変える教育の力ととどまりたいとする心の危険性）。もう1つは、4日目の1本目の講演 Cynthia English氏の「Technology and Humanity: Global Friendship can change Future」（技術と人類：未来を変変える地球規模の友情）である。以下詳細を述べる

3-3-1 人生を変える教育の力ととどまりたいとする心の危険性

発表者のMohamed氏は、シエラレオネ共和国出身である。この国では1991年から2002年までダイヤモンド鉱山を巡り内戦が起きており、彼も幼少期をここで過ごすこととなった。内戦に巻き込まれ彼の家族は殺され、少年兵となることを強いられた。10歳にして人を殺すか、殺されるかの2つの選択肢しか残されていなかった。内戦が終わって2007年の14歳の時、偶然にも難民としてアメリカに渡ることができた。彼はそこで教育を受ける機会に恵まれ2015年にはジョージワシントン大学を卒業し、4か国語を話すまでになった。現在は人権活動家としてユースの代表として活躍するまでになった。もし彼が、そのままシエラレオネにいれば教育を受ける機会もなく、現在の姿はなかったはずである。教育を受ける機会を得ることで未来に向かって限りない可能性が開けてくるのが分かる事例であった。発表後は会場からも惜しめない拍手が響いた。

3-3-2 未来を変変える地球規模の友情

Global scribe (GS)の創始者であるCynthia English氏は作家である。彼女は、世界の子どもたちが作家として、様々な記事を投稿できるサイトを作成し、どの国で何件の投稿があったかをリアルタイムで地図上に提示できるようにしている。8歳から25歳の子供達が参加で

き、教室やクラブ単位、個人でも参加することができるようになってきている。



図2 GLOBAL SCRIBE 投稿記事のマップ

参加者には4つのステップがあり、第1のステップとして月1回の投稿、第2のステップとしてビデオの投稿がある。さらに第3のステップとして半年ごとに3分から7分程度の短編映画の投稿、第4のステップとして自分が興味のあるチームに分かれ、作業を続けることである。

このGSの一番の大きな特徴は、書いた記事の善し悪しの評価はないということである。誰もが互の記事を尊重し、互いの文化を認めあうことで、若者間のコミュニケーションを広げることを目的としている。

今回日本から参加した高校生が、このプロジェクトの日本人の登録第1号となり、帰国後に「武士道」などについて投稿し記載されていた。まさに世界の中高生が作家となり、投稿する仕組みなので、生きた英語の勉強となる。このような活動が学校の中に取り入れられると英語の授業が活性化するであろう。

3-4 分科会の事例

全部で65の分科会があった。同時に5つの分科会が同時開催されるため、筆者が参加した4本の分科会の内容を紹介する。

3-4-1 分科会 NO.10 (台湾)

“ Possibilities for intercultural exchange: Taiwan experience “ 「国際交流の可能性：台湾の経験より」 (4人の発表者)

- 1) Cheng-Chan Chen : 中学校教諭 PHD
- 2) Tsui-Chien-Wu : 幼稚園教諭 幼児教育の修士
- 3) Ta-Shia Bau : 高校英語教諭 外国語教育の修士

4) Chi-Chen Wu : 高校英語教師

以下4名の発表の内容を紹介する

1) Cheng-Chan Chen : 中学校教諭 PHD

2015年に行われた日本でおこなわれたインターナショナルユースサミットに参加。これを機会として、日本の名古屋の男子高校とTEDDYBEARプロジェクトを実施した。このプロジェクトはたいへん取り組みやすく人気がある。互いの国の大使として動物のぬいぐるみを交換し、外国から来たぬいぐるみの視点からデジカメで撮ったり、日記に書いたりして、記録、最終的にはそのぬいぐるみが母国に帰ることで異文化理解を行えるプロジェクトである。導入のプロジェクトとしてはとてもやりやすいものである。開始当初の1年目は、台湾の高校の1クラスだけの参加であったが日本の高校と交流し、ビデオの交換も行った。どちらの高校もシャイな高校生が多かったが、Skype meeting 2回実施(1回目は日常生活、2回目は自然災害)について行うことでお互いの理解を深めることができた。

2年目は交流を深めるために日本と台湾の双方で交流クラスを増やした。テーマも広げ、食べ物の紹介や、カードの交換を実際に郵便で行った。正月の祝賀の方法なども祝い方が違っていて楽しめたようである。英語を使つての詳細な部分までの交流は難しいが、正月のカードの交換などで互いの文化を十分理解することができた。

2) Tsui-Chien-Wu 氏の発表 (幼稚園の教員)

カナダの小学校とのTeddy Bearプロジェクトでの交流 台湾の正月のカードの送付し異文化理解を行うことができた。なかでも台湾の児童の100歳のおばあちゃんがベアーに着せる服を作ってくれるなど児童の家族を巻き込んだ活動となった。また休み期間中に実際に、カナダの教員が台湾を訪問する機会もあり、小さい子供たちによっては、実際にカナダの先生と会う機会にもなり、より身近に感じることができたようである。

3) Ta-Shia-Bau と Chi-Chen Wu (高校英語教師)

日本の名古屋の豊橋高校との交流で壁画を

共同で描く アートマイルプロジェクトの紹介。TV 会議を 6 回実施。日本の高校は修学旅行で実際に台湾を訪問する予定があり、事前の交流として台湾での交流相手を探していたようである。台湾の高校生にとっても外国である日本の高校生と英語で会話するのはとても興奮したと述べている。ホリデーカードエクステンジで 英語で書いてあるカードを实际もらうことでとても喜んだ。アートマイルでは美術の教員にも手伝ってもらい、実際に日本の高校生が台湾に修学旅行で訪問してくれた時に完成した壁画を披露することができた。

台湾からは 3 件の発表があり、そのうち 2 件は日本との交流の発表であった。今後とも台湾とは多くの国際交流を実施できると感じた。

3-4-3 分科会 no. 14 (日本の高校生)

“ Japanese culture and Okinawa culture “
「日本の文化と沖縄の文化」

発表者 : Hiroshi Ueno

日本の沖縄の尚学館高校の教員と 4 人の高校生の発表である。この学校は私立の学校で、校内に iEARN 部があり、毎年国際会議に参加している。特に引率の上野氏はこの部活動の創設者である。今回の高校生のプレゼン内容は、体育の授業として取り組んでいる沖縄空手の説明と日本文化の習字と折り紙の説明と実演であった。習字は外国の教師には人気が高く、お手本をもとに書くのであるが、文字を絵画的にとらえるためか何度も塗り重ねていたことが印象的であった。高校生が英語で堂々と日本文化について説明し実演したことは発表した高校生にとって大変な自信となったと感じた。このような機会は本当に貴重である。

3-4-4 分科会 no. 26 (アメリカ)

“ Social and Emotional Skills + Creative Expression = Winning Learning “ 「社会的情緒的スキルと創造的表現活動は学習効果を高める」

発表者 Diana Feldman (USA)

Andrea Aranguren (Argentina)

ニューヨークの ENACT (<http://enact.org>) という団体が展開するドラマセラピーとクリ

エイティブシアターのワークショップ。CASEL (Collaborative Academic Socio Emotional Learning : <http://www.casel.org>) という団体は、このようなすすめ方が学力向上にもつながるといふことで、全米で展開するようになったが、ENACT もその一つである。「生徒が教師のことを聞かない」状況のドラマが演じられた。登校してきても宿題を出さず、教師の言うことを聞かない生徒に対して、教師が怒り、最終的に生徒を教室から追い出した。この扱いを巡って参加者が意見を述べるのである。そのあとでグループごとに、参加者が教室や学校をめぐる問題考え、教師が直面する問題をロールプレーで演技した。そして、教師の行動の可否を参加者が論議するのである。

3-4-5 分科会 no. 33 (ブラジル)

“Teddy bear project”

発表者 : Rose Gimenes (ブラジル)

台湾、ペルー、オーストラリアの 3 カ国と同時にプロジェクトを実施したブラジルの先生の発表。ブラジルは公用語がポルトガル語であるが、外国に友達を持てることから、熱心に英語に取り組むようになったと報告があった。特に台湾とは TV 会議なども実施し、台湾の小学生が自己紹介を英語で行っているビデオを見せていた。

ブラジルの交流相手の台湾の教員が、このモロッコの会議にも実際に来ており、ブラジルからだけでなく、台湾の児童の様子も説明してくれた。台湾から送られたテディベアには女の子の着替え用の洋服やチャイニーズヨーヨーなども一緒につけられていたが、これは、保護者に協力して作ってもらったことを述べていた。このプロジェクトは小学生には手ごろであり、一度に複数の国とも交流が可能である。

3-4-6 分科会 no. 43 (アメリカ)

“International Book Club and Online Resources “
「国際ブッククラブおよびオンライン・リソース」

W. Marshall , Fay Asfour Stump (USA) / Khalid Fethi (Morocco)

北米ではよく知られているラーニング・サークルを読書活動に応用しながら、子どもたちの意

欲をひきだそうとするものである。このプロジェクトのゴールは、以下の4つ、1) グローバリテラシーを身に着けること、2) 読書を通して国連のSDGs（国連持続発展目標）に関する理解者を増やすこと、3) 読書の感想をフォーラムで交換する事、4) SDGs について述べられている多文化の文学や本を紹介することであった。multicultural books を読書の対象にする理由についてFay氏は6つの理由を挙げている。

- 1) その国に読者をいざなう。
- 2) 人類共通の感情を味わうことができる。
- 3) ステレオタイプの考え方をやめる。
- 4) 世界の様々な年齢の人の考え方を学べる。
- 5) 寛容さと尊敬を学べる。
- 6) 文化的遺産としての誇りを学べる。

実際の活動では、本に関する質問を児童・生徒がつくったり、印象に残った文章を紹介したり、皆に伝えるようなポスターをつくるようにすすめられる。

ワークショップでは、まず、自分の生き方に影響を与えた本をカードに書き、ペアになって紹介しあうアイスブレイキングがあった。そのあとそれらをSDGsの項目にあてはめるように求められた。短時間でいくつものオンライン・リソースが紹介され、また典型的な書籍も学齢別にあげられた。ここでいうオンライン・リソースとはネット上で公開されている物語である。そこで提示されていたものは、”Global Read Aloud” “Oxford Owl” “Story Line Online” “Kid World Citizen” “ALA’s Book Club Central” “International Children’s Digital Library” “Children’s Books Online by the Rosetta Project” などがあり、ほとんどが無料で公開されている。

今後の考えられる活動として、同じ本を読むか、テーマが同じ本を読み、フォーラムに感想を書き込む、その上でTV会議を実施し話し合うというものであった。内容的には面白いのであるが、英語でのかなり高度な議論が必要となってくるため、日本の子供には参加は難しいと感じた。

4 まとめ

年1回のiEARNの会議には、世界中から多くの教師が集まってくる。お金と時間をかけて世界と繋がりたいと思う教育者が集まってくるのである。日ごろはネット上でしか会えない教育者同士が、実際に顔を合わせる貴重な場でもある。

日本では次の学習指導要領の柱の「主体的、対話的で深い学び」の実現は、実際に日本の児童生徒を海外の同世代の子供達とつなげることで、実現可能な側面があると考えられる。主体的な学びには、目的意識・相手意識が必要であるが、実在する外国の同世代の児童・生徒の存在を意識させるプロジェクトに関わることで、共同で取り組む目的、相手意識を持たせられる。また対話的な学びでは、ICT活用力と英語力が必要となってくる。そして国連の到達目標であるSDGsの達成を目指すことで、日本だけではなく世界といった視点から物事を考えられる深い学びにつながると考える。

今回参加してみて、台湾やブラジルの実践報告で出されていたTeddy Bear Projectに改めて魅力を感じた。筆者はこのプロジェクトは小学生向きだと考えていたが、台湾では日本の高校生との交流の取り掛かりとして使われており、そこから自然災害の話題に昇華している。このプロジェクトをきっかけとして、より深い交流が可能になっている。また、コンテンツさえ作ってしまえば交流の学校が複数になっても応用できるのである。今後はこの会議で知り合いになった海外の教育者と連絡を取って”Teddy Bear Project”で日本の地元の小学校と海外の小学校をつなげていきたいと考える。

(1)<https://iearn.org/about/history>

2017.08.09

本投稿は「金沢星稜大学人間科学研究 11 巻 1 号 「2017 年度 iEARN 国際会議報告－iEARN モロッコ国際会議の内容と意義－」 清水和久から1部抜粋して収録。

2 1. 初海外モロッコで見る世界の一端

名前 清水 拓人 (石川県立金沢泉丘高校)

初の海外体験が iEARN のモロッコ大会 Youth への参加となりました。モロッコで同世代の学生と活動してみて、彼らのプレゼン力や英語力には驚きの連続でした。またモロッコの街に出て、子供たちの生活力やたくましさを実感することができました。大会中に参加した GS (Global scribes) というプロジェクトに入ったことで、帰国してからも日本文化について投稿するなど、同じ世代の人たちとのつながりが続いています。このようなつながりが最終的に世界平和につながると感じました。

iEARN モロッコ Global scribe

1 同年代のモロッコの学生と活動してみても

まず、第一に驚いたことは同じくらいの年頃の子が母国語でもないのに、英語を使いこなしていたことです。youth の活動ではいろんな国の学生のプレゼンを英語で聞くのですが、本当に上手く英語で伝えていて、ただただ感心していました。また、プレゼンの内容も自分と近い年の子達が企画・実行したものとは思えないほどしっかりしているものでした。モロッコの中学三年の友達が発表していたものを紹介します。彼らは自分たちで募金を募り、モロッコの山岳の貧しい子供たちに服とおかしを買って、パーティーを開いたそうです。とても温かい心と実行力に感激しました。それと、発言するときの積極性、初対面の人とでも進んでかかわっていきこうとする姿勢が日本人にはあまりないものであり、見習っていく必要のあるものだと思います。

2. モロッコの日本人に対する印象

モロッコの学生は日本のことを知っていると思いますか。ここはほんとに自分が驚いたことなのですが、彼らは驚くほど日本のことをよく知っていて、本当に日本に興味津々。日本人であることに初めて実感とともに誇りを持つことができました。逆に自分があちらの国のことをよく知らないことが申し訳なくなりました。自分が日本から来たことを言うと、すぐに漫画の話や知っている日本の文化の話をしてくれて、日本の事を知っていてくれたことがうれしく思わず笑顔がこぼれてしま

ました。あるモロッコの女の子からは「日本人って、みんな頭がいいって聞いたけどほんとう？」と聞かれ反応に困ってしまいました。なるほど。日本人はそういう風にみられているのか。これは本当にうれしいことだと思います。

3. モロッコの街を訪れてみて

始めにアトラス山脈にある山岳の村を訪れ、そのあとに市場のほうをまわりました。どちらにも共通して言えることはモロッコの子供たちはとてもたくましいということです。山岳のほうでは、バスを降りると同じくらいの年ごろの子がグッズを持って、買ってくれよと近づいてきました。自分は思わず買ってしまいました。彼らはそういう風にして生計を立てているみたいです。観光客が来ないときは家の手伝いをしているのかな？あまりに日本と状況が違うことに驚き、そんな生活もありなのかなと思いました。ただやはり、教育をしっかり受けているんな世界、いろんな価値観を知っておくということは大切なことだと思います。市場では15歳くらいの女の子がティッシュ売りの売り子をしていました。ポケットティッシュ1つ20デルハム(240円くらい)とだいぶ破格ですが、もち前の陽気さとコミュニケーション力でしっかり売れていて、本当にたくましいなと思いました。

4. iEARN での発表

日本からの発表で NDYS(Natural Disaster

Youth Summit)の発表をさせていただきました。そこでは一枚の布に各々が災害について思いのこを書き込んだり、Youthの学生がアイパットのアプリを使って全体に発表しました。自分はそこで代表として閉会式にNDYSの上表文を簡単にではありますが発表させていただきました。

5. iEARN モロッコ大会から帰国して

iEARNの発表の中にGS(Global Scribes)と言うものがありました。GSは学生から青年までのyouthによって構成され音楽、科学、宗教、文化などをInstagram、FacebookなどのSNSを通して発信します。僕はそこでGSにwhat's up(海外版チャットアプリ)を通していれてもらいました。そして帰国後、GSから日本の記事を書いてもらいたいと言うことで、武士道について書かせてもらいました。外国人に日本文化の記事を通して発信し、知ってもらおうということは初めてのことで改めて日本文化を見つめ直すことができました。

6. まとめ

今回のiEARNモロッコ大会は自分にとっての初の海外で異民族、異文化に触れるとても良い機会になりました。日本にいただけでは決して理解できないようなイスラームの世界観、冗談ではなく本当に肌を焼くような気温46度の灼熱の町、砂漠独特のサボテンの実や石でできた真っ赤な町など本当に貴重な体験をすることができました。と、同時に市場の出入りに敷物を敷いて座る寄付を求めるシリア難民の家族や、学校に行っているのか分からない山地で観光客にグッズを売っている少年などただ楽しかっただけでは済まされないはっとさせられるような光景もありました。シリア難民について言えば帰りに立ち寄ったパリの地下鉄の構内にも、同じように座って寄付を求めている人達がありました。特に心が痛くなったのは彼らが幼い子どもと妻を連れた家族だったことです。現在EUには難民受け入れ制度があると聞きますが、実際にそのような生活の行き届

かない難民の家族もいるということでまだまだこの問題は解決にはほど遠いものなのだと思います。そして、この問題を解決するために必要なことは受け入れ体制を整えることはもちろんなのですが、彼らが母国に帰られるように紛争自体をなくすことが最優先事項だと思います。

個人的な変化としては世界各地にたくさんの友達(大半がモロッコ人の友達)ができたと言うことです。実のところFacebookの投稿欄がほとんどアラビア語と英語で埋まっています。現地に友達を持つこと、そして実際にそこに行ってみることはその国を知る上で非常に大事なことだと思います。一度行ったことのある国や友人のいる国の事件がニュースで流されているのを見ても人ごととは感じなくなりました。きっとそういう風にして真の国際理解、国際平和に繋がっていくのだと思います。



**GLOBAL
SCRIBES™**